平成 17 年度都市再生モデル調査

# 「多摩みんなでつくる暮らしの安心づくり産業」のための基礎調査報告書

平成 18 年 3 月

国土交通省 住宅局

# 目次

目次 ..... - 1 -

【概要編】

調査概要 ..... - 4 -

１．応募団体名 ..... - 4 -
２．調査名 ..... - 4 -
３．推薦団体名 ..... - 4 -
４．調査の対象地域 ..... - 4 -
５．提案した活動の内容 ..... - 4 -
６．本調査と関連する活動実績 ..... - 6 -
７．本調査の成果等、本調査の実施過程で顕在化した課題など ..... - 6 -

【本編】

はじめに ..... - 8 -

第１章　調査・分析の枠組み～「暮らしの安心マネジメント」について ..... - 9 -

1.1.「暮らしの安心マネジメント」とは ..... - 9 -
1.2. 生活資源とは ..... - 9 -
1.3. サポートとは ..... - 10 -
1.4. 生活の場面 ..... - 11 -
1.5. 調査の方法 ..... - 12 -

第２章　多摩市におけるニュータウン居住者の現況 ..... - 14 -

2.1.町丁目別人口・世帯状況 ..... - 14 -
2.2.世帯当たり人員が２名以下の地域 ..... - 15 -
2.3.高齢化率の高い地区 ..... - 15 -
2.4.まとめ ..... - 21 -

第３章　安心と不安の風景 ..... - 22 -

3.1. 話をうかがった人 ..... - 22 -
3.2. 同居の不安 ..... - 22 -
3.3. 独居の安心と不安 ..... - 24 -
3.4. 移動の不安 ..... - 26 -
3.5. 子育ての安心と不安 ..... - 27 -

3.6. 親の介護の不安 - 27 -
3.7. コミュニティの安心、不安 - 28 -
3.8. 仕事の安心、不安 - 29 -
3.9. さまざまな安心に影響を与える要因 - 30 -
3.10. コメントから読み取れる問題のポイント - 31 -

**第４章　不安に対処するためのサポート機能 - 33 -**

4.1. 暮らしのサポート機能類型化の試み - 33 -
4.2. 分析の対象となるサポートのシーン - 33 -
4.3. 暮らしのサポート機能類型化の結果 - 33 -
4.4. サポート機能間の関係 - 43 -
4.5.「安心の階段」とサポートプロセス - 48 -

**第５章　不安を解消するための生活資源とサポートの関係 - 51 -**

5.1. ソフト資源とハード資源 - 51 -
5.2. 埋め込まれるサポート機能 - 52 -
5.3. 不安解消資源としての読み替えと機能追加 - 56 -
5.4. 多摩市における生活資源の読み替えの結果 - 66 -
5.5. 不安解消のための生活資源の考案 - 68 -

**第６章　想定されるシナリオイメージ - 69 -**

6.2.「共助重視型」への移行 - 69 -
6.1.「自立」を超えて～多様性の保持という新しい自立 - 69 -

**第７章　「安心づくり産業」提言に向けて - 72 -**

7.1. 多摩ニュータウンの「安心づくり産業」１０のプロジェクト - 72 -
7.2.「暮らしの安心づくり産業」実現のためのロードマップ - 80 -

巻末資料

- 生活場面の中のサポート機能分析
- 多摩市における不安解消のための生活資源 100

# 概要編

## 調査概要

| | |
|---|---|
| **１．応募団体名** | 特定非営利活動法人エヌピーオー・フュージョン<br>理事長　富永一夫<br>連絡先（電話）：042－338－1396（多摩ＮＰＯセンター気付）<br>連絡先（e-mail）：tanuki@pompoco.or.jp |
| **２．調査名** | 「多摩みんなでつくる暮らしの安心づくり産業」のための基礎調査 |
| **３．推薦団体名** | 東京都多摩市<br>連絡先：東京都多摩市くらしと文化部生活文化課 |
| **４．調査の対象地域** | |
| **（１）対象となる行政区域名、地区名等** | 東京都多摩市全域 |
| **（２）対象となる行政区域及び地区の特徴** | 人口：143,479 人（2006 年 2 月 1 日現在）<br>世帯数：61,743 世帯<br>※人口は、外国人登録含む。出典元：多摩市ホームページ |
| **５．提案した活動の内容** | |
| **（１）テーマ、課題** | 多摩市民が最も望んでいるのは、成熟した都市生活の様々な不安（例えば老朽化した集合住宅の防災上の不安、緑が多いための防犯上の死角、急速な高齢化による福祉の危機など）を解消することである。これらの不安解消に必要なものは、新たな施設やシステムによる保障ではなく、市民ひとりひとりが日々の暮らしの中で感じる「安心」という感覚であり、これは市民が自ら生みだすしかない。<br>そこでこの「安心感」を生みだす仕組みを、これからの都市の暮らしと産業の基盤として、地域に関わる人たちが共同で構想する。そのためには都市の暮らしと仕事を見つめなおし、すでに取り組まれている安心づくりの活動を掘り起こし、既存の地域インフラを安心づくりの拠点として再認識する調査の必要がある。<br>さらに、それらを結ぶ仕組みも構想しなければならない。本調査は、市民、大学、企業、行政が 5 年かけて共同で取り組む「多摩みんなでつくる暮らしの安心づくり産業」プロジェクトの基礎調査として位置づけられる。 |
| **（２）本調査による活動内容の概要** | **①本調査費により行われた活動内容の概要**<br><br>■「多摩みんなでつくる暮らしの安心づくり産業」調査推進事務 |

| | | |
|---|---|---|
| | | 局の設置<br>・　ＮＰＯフュージョン研究所と多摩大学総合研究所の各担当者による調査の枠組の検討とスケジュールの設定(2005年7月)<br>・　調査開始（調査期間 2005 年 7 月～2006 年 2 月）<br><br>■調査の中間報告会の実施<br>・　２回実施（2005 年 10 月・2006 年 1 月）<br>・　平均参加人数 7 名<br>・　調査の方向性へのアドバイスなど<br><br>■多摩市におけるニュータウン居住者の現況把握<br>・　多摩市くらしと文化部生活課の協力により、多摩市の町丁目別・男女別・年齢別人口データの入手<br>・　上記により、町丁目別特性を把握<br><br>■多摩ニュータウンにおける安心と不安の誘発要因の導出<br>・　エスノグラフィー調査（ヒアリング調査）の実施<br>・　10 回合計 12 名実施（2005 年 7 月～2006 年 2 月）<br>・　上記調査結果の分析により、「安心の階段モデル」の構築と「共助重視型」シナリオの考案<br><br>■不安に対処するためのサポート機能の導出と類型化<br>・　上記のエスノグラフィー調査結果の分析により、サポート機能 7 類型の導出と「サポートのプロセスモデル」の構築<br>・　「安心の階段モデル」と「サポートのプロセスモデル」の適合<br><br>■不安を解消するための生活資源の調査<br>・　ヒアリング調査<br>➢　「もしもششんぶん」(2005 年 8 月)<br>➢　ＮＰＯ「ゆづり葉」(2005 年 11 月)<br>➢　京王自動車株式会社（2006 年 2 月）<br>➢　社団法人日本フランチャイズチェーン協会（2006 年 2 月）<br>➢　都市再生機構（2006 年 2 月） |

| | | |
|---|---|---|
| | | ➢ ＮＰＯ福祉亭（2005 年 11 月）<br>・ 上記調査により、不安解消のための生活資源としての読み替えを実施<br>・ 資料収集と分析（2005 年 12 月～2006 年 3 月）。この作業により、『多摩市における不安解消のための生活資源１００』リストを作成。<br><br>■「暮らしの安心づくり産業」プロジェクトの考案とロードマップの作成<br>・ 「共助移行型シナリオへのワークショップ inＮＰＯフュージョン」開催<br>・ 1 回開催（参加人数 7 名・2006 年 2 月）<br>・ 上記により、多摩ニュータウンに必要な 64 のサービスと「安心づくり産業」の 10 のプロジェクトを考案<br><br>**②本調査費以外の財源を投じたり、あるいは経費をかけずに、本調査の一環として行った活動内容の概要**<br><br>■情報収集<br>・ 都市再生機構社員との面談（2005 年 7 月）<br>・ 多摩中央警察署員との面談（2005 年 9 月） |
| **６．本調査と関連する活動実績** | | 住み替え支援事業受託（国土交通省） |
| **７．本調査の成果等、本調査の実施過程で顕在化した課題など** | | ・「安心の階段モデル」「サポート機能の 7 類型」「サポートのプロセスモデル」「共助重視型シナリオ」「多様性の保持という自立」など新しいモデルを構築できた。<br>・「暮らしの安心づくり産業」の具体的なプロジェクトを提案できた。<br>・多摩ニュータウンにおける広域自治組織（本調査提案では「多摩組」）の必要性が顕在化した。 |

# 本編

## はじめに

「『多摩みんなでつくる暮らしの安心づくり産業』のための基礎調査」の最終的な目的は、暮らしの安心づくり産業の提案と、その実現に向けた５年間のロードマップ策定にある。そのためには、多摩ニュータウン居住者が感じている「暮らしの安心・不安」について調査・分析しなくてはならない。

明確にすべき点は、以下の４項目である。

（１）居住者に安心・不安を感じさせる具体的な誘発要因

（２）安心・不安の誘発要因と多摩ニュータウンの生活環境との関係

（３）不安解消のための、対処方法

（４）不安解消の際の「適切さ」の基準

これまで多摩ニュータウンの居住者意識については多くの調査がなされてきているが、「安心・不安」の実態を探ることは難しい作業だ。なぜなら「将来の安心・不安」は、人々の頭の中では、ある生活場面と結びつけられてイメージされるものであるため、「不安なことは何ですか？」と問われても、確実な回答は得られないからだ。

「通勤時の防犯の上での不安は何ですか」とか、「親が職を離れた時の不安は何ですか」というように、場面を設定しないと相手は答えられない。しかも、その場面によって、感じる不安の内容が異なることが多々ある。

安心・不安は、居住者の生活場面の中にある。

そこで、本調査では、居住者のいくつかの生活場面における安心・不安を、インタビュー調査とその多様な解釈で構成し、単なるアンケート調査では表に出ない生活者の内実を明らかにすることとした。

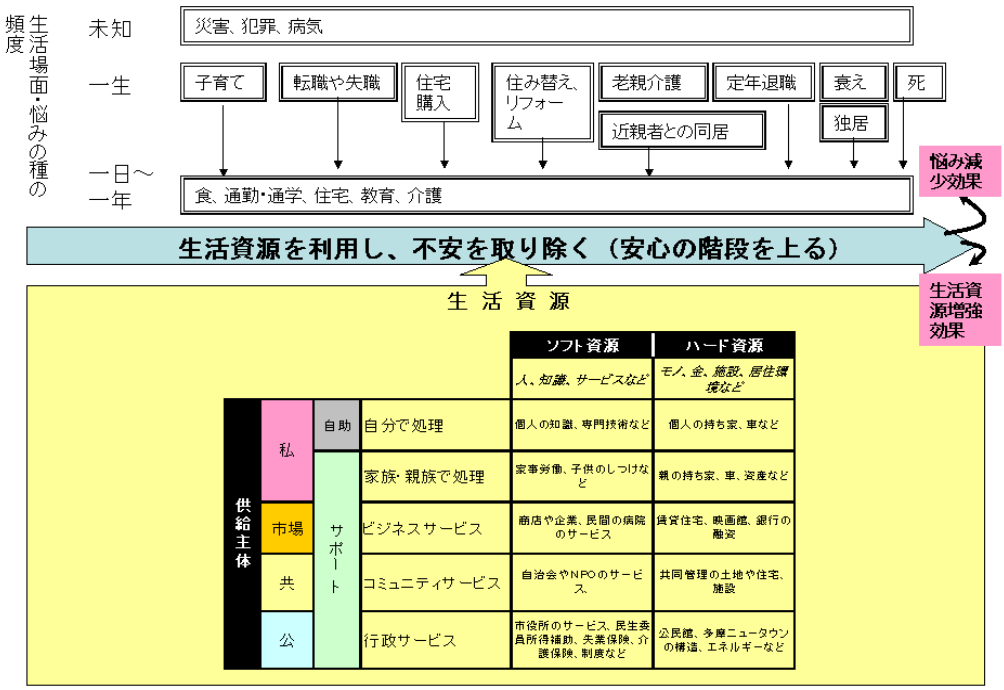
そして、「居住者が生活場面で感じる安心・不安に、居住・住環境、人的資源をどのように活用すれば、安心を促進し不安を低減する資源となりうるか」という問いを立てることにした。

# 第１章　調査・分析の枠組み～「暮らしの安心マネジメント」について

## 1.1.「暮らしの安心マネジメント」とは

人々は様々な生活場面で、安心や不安を感じる。その場面の中でも特に大きいのが、就職、結婚、子育て、住宅購入、介護、退職など、節目となるライフイベントである。ライフイベントとは、自らその後の人生（ライフコース）を選択することである。悩みの種に直面したり、将来の悩みの可能性を発生させたりすることもある。ライフイベントに遭遇した時に、自らがもっている、あるいは調達できる生活資源を充当することによって、不安に対処し、安心感を得る。悩みの種に生活資源で対処することにより安心を得て生活を保障しようという取り組みを、ここでは「暮らしの安心マネジメント」と呼ぶ（図１）。

図 1　「暮らしの安心マネジメント」




## 1.2.　生活資源とは

それでは生活資源とは何か。生活資源とは、生活をよりよくしたいという目的を達成するための手段であり、生活諸欲求を充足発展するのに有用な機能を持つ源泉である[1]。この

[1] 宮崎礼子編『現代の家庭と生活経営』朝倉書店，1999

用語の捉え方、分類の仕方はたくさんあるが、ここではシンプルに、資源の性格からみた「ソフト資源」、「ハード資源」という分類と、また資源の供給先である「私」「市場」「共」「公」という分類のマトリクスで考えてみたい。

まず「ソフト資源」とは、人的資源や人が源泉となる生活資源である。人、知識や技術、制度、人為的なサービスなどがあてはまる。一方、「ハード資源」は、モノ、金、施設、居住環境など、人にかかわるもの以外の生活資源である。

次に、この生活資源を誰が供給しているかという分類である。「私」領域は、自分自身、家族と親族などの血縁者、「市場」は民間企業によるビジネスサービスであり、「共」領域は、地域や近隣、同業者、趣味のサークル、ＮＰＯなどの民間の非営利組織によるコミュニティサービスを意味する。「公」はいわゆる国や地方自治体などの行政サービスである。この二つの分類方法によるマトリクスが図２である。

図 2　生活資源と供給主体のマトリクス

| | | | | ソフト資源 | ハード資源 |
|---|---|---|---|---|---|
| | | | | *人、知識、サービスなど* | *モノ、金、施設、居住環境など* |
| 供給主体 | 私 | 自助 | **自分で処理** | 個人の知識、専門技術など | 個人の持ち家、車など |
| | | サポート | **家族・親族で処理** | 家事労働、子供のしつけなど | 親の持ち家、車、資産など |
| | 市場 | | **ビジネスサービス** | 商店や企業、民間の病院のサービス | 賃貸住宅、映画館、銀行の融資 |
| | 共 | | **コミュニティサービス** | 自治会やNPOのサービス、 | 共同管理の土地や住宅、施設 |
| | 公 | | **行政サービス** | 市役所のサービス、民生委員所得補助、失業保険、介護保険、制度など | 公民館、多摩ニュータウンの構造、エネルギーなど |

## 1.3. サポートとは

私たちはほぼ例外なく、他者と何らかの関係を持って暮らしている。この場合の他者は、自分以外の誰かであって、家族も他者である。その他者との関わりのなかで「助ける」「助けられる」という行為は決して珍しい現象ではない。朝を起きて夜寝るまで、私たちは誰かの援助によって暮らしているし、誰かを援助することも普通の行為である。他者の力を借りるのは、ほとんどの場合、「自分ひとりでは解決できない状況」にあるか、また、他者の力を借りることで、よりよい結果をもたらそうとしている時である。その中で「困っている人・弱者」を援助する場合の人間関係や技法を追求してきたのが社会福祉の分野であ

ろう。社会福祉において、援助とは貧困者、児童、障がい者、高齢者などの社会的弱者に対する保護、育成、社会参加促進機能であり、ほとんどの場合、自治体や国家すなわち政府によって組織的体系的に展開される活動を指す[2]。

また、突発的な状況での援助の生起の条件や、援助による人間関係のマイナスの影響などについては、社会心理学の分野で光が当てられている。さらに経済学においては、非対称的な取引という観点から援助を捉え、社会学や組織論では援助を協働関係のひとつの形だと捉えるなど、援助については様々な側面が検討されてきた。

しかし、本調査では、そのような「誰が援助するのか」「援助の対価があるか」「援助の生起は、個人的規範からか、社会的規範からか」といった視点よりも、「その援助が満たすニーズは何か」という、援助の機能という視点で調査・分析する。

例えば、高齢者が警備会社と契約して、住まいに警報システムを導入するのは、防犯などのための監視であり、市場サービスの利用である。一方、母親が美容院に行くために、少しの時間、友人に子供を見てもらうことは、コミュニティや友人関係に生まれる援助シーンである。母親はお礼にケーキぐらい買ってくるかもしれないが、その援助の対価を支払うということにはならないだろう。しかし、この２つの援助は、機能的に見れば、「見守り」という同じカテゴリーで考えることができる。この「見守り」を受けることで、高齢者は安心して生活し、母親は安心して美容院に行くことができる。

このような「機能」で様々な人のやりとりを網羅的に分析することで、ビジネスサービスであろうと、行政による福祉サービスであろうと、同じ「援助」シーンととらえることになる。ただし、「援助」という言葉は、社会福祉の社会的弱者に対する特殊専門的な援助を想起させるので、これらと混同しないように「サポート」と呼ぶことにする。

この定義に沿うと、図２において、家族といえども、人の資源を利用するということは、サポートを受けるということになる。つまり、「暮らしの安心マネジメント」は、ほとんどの場合、サポートのマネジメントであるといえる。

### 1.4. 生活の場面

多摩ニュータウンの安心・不安を分析するために、どのような生活場面を調査対象とするか選ばなくてはならない。

多摩ニュータウンの問題は、第一には居住環境と住環境の問題である。空間、地域でのサービス供給、居住者達の暮らし方という三つの側面が問題となる。インタビューを総括すると、各ライフステージにおける「同居」「独居」「子育て」「老親の支援」「仕事」、この５つが織りなす場面が数多く語られた。これらは、社会人ならほぼ誰もが遭遇するライフイベントであるが、多摩ニュータウン居住の特徴が現れた場面でもあった。さらにライフ

[2] 古川考順・岩崎晋也・稲沢公一・児島亜紀子『援助するということ』有斐閣，2002

イベントではないが、「移動」、「コミュニティ」という生活場面についても無視するこができない。

そこで、この７つの生活場面に焦点を絞ることとした。

## 1.5. 調査の方法

上記の枠組みにあわせて、以下のような調査方法を選択した。

### 1.5.1. エスノグラフィー調査

多様な生活場面で立ち現れる「安心・不安」を調査するために、聞き取り調査を中心とするエスノグラフィー調査を採用した。文化人類学で多様な文化を調査する時に用いる確立された手法である。一見すると世間話のようなインタビューを積み重ね、安心や不安がどのような生活の文脈の中で意識されるのか、その気づきを誘発しながら、その方の生活ヒストリーを聞き取るという手法である。これにより、本人が漠然と感じる不安を明確化するとともに、自分でも意識しないが「そういえば、退職後、夫と同居するのも不安よね」というように、気づかれ、発見される「安心・不安」も記述することが可能となった。

これらインタビュー内容の意味を、調査者は「語られた内容」だけではなく、「語られた意図」まで想像し、そのような「語り」が成立するための文化的条件まで検討した。そして、それを物語として構成したのが本報告である。

※なお、インタビューはすべて松本、中庭の２名のみで行っている。本文中ではコメントの内容のみを簡略化して引用し、発話者が特定できるような記述は一切行わないこととした。

### 1.5.2. 調査対象地域

本調査は、多摩市全域を調査対象地域としているが、調査進行の中で、多摩市のなかでも、特にフォーカスすべき地域、または比較のために他市の地域を調査する必要が出てきた。したがって、調査対象者の居住地や、調査対象団体の活動地域は、多摩市に限らない。

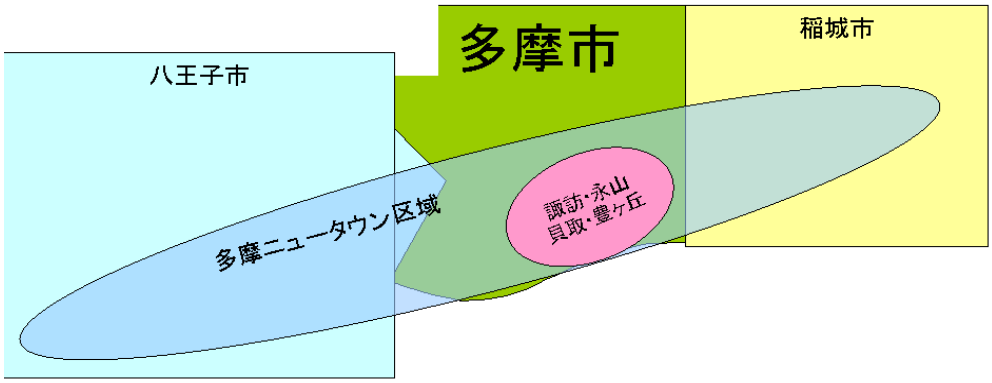
多摩市の「暮らしの不安・安心」といったときに、集合住宅に代表されるニュータウン開発地域の問題は、今後最も重要な課題である。特に開発後３５年近くを経た諏訪・永山地区やその次の貝取、豊ヶ丘については、これからの高齢化への対応というところで、重点的に取り上げる必要があると判断した。この根拠は次章で説明する。

また、ニュータウンの開発地域が、稲城市、多摩市、八王子市、町田市の４市にまたがっているため、同じニュータウン地域の八王子や稲城の事例を取り上げて、ニュータウンの現状を多角的に考察している。

したがって、調査対象地域は、下図のように、多摩市全域を視野に入れながら、ニュー

タウン地域を主な対象にし、今後という点で、特に諏訪・永山地域や貝取・豊ヶ丘地域にフォーカスするときがある。さらに、開発時期が異なる多様なニュータウンをとらえるため、近隣の市への横への広がりを持たせたことになる。

## 調査対象地域



# 第２章　多摩市におけるニュータウン居住者の現況

## 2.1.町丁目別人口・世帯状況

表１は、多摩市内各町丁目別の人口、世帯を一覧にしたものである。Aは高齢化率 20%以上の町丁目、Bは、世帯当たり人員が２名以下の丁目、また、Cは高齢化率 20%以上で、世帯当たり人員が２名未満の町丁目である。

表１　多摩市内の人口・世帯数（平成１７年３月末）※多摩市提供データによる

| | | | 人口 | 男 | 女 | 老齢人口 | 高齢化率 | 世帯数 | 1世帯当たり人数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 関戸 | １丁目 | 977 | 455 | 522 | 192 | 19.7% | 431 | 2.27 |
| | 関戸 | ２丁目 | 2,311 | 1,147 | 1,164 | 384 | 16.6% | 1,140 | 2.03 |
| | 関戸 | ３丁目 | 1,423 | 669 | 754 | 261 | 18.3% | 623 | 2.28 |
| B | 関戸 | ４丁目 | 2,037 | 959 | 1,078 | 314 | 15.4% | 1,042 | 1.95 |
| | 関戸 | ５丁目 | 1,202 | 614 | 588 | 199 | 16.6% | 569 | 2.11 |
| | 関戸 | ６丁目 | 769 | 394 | 375 | 77 | 10.0% | 312 | 2.46 |
| C | 連光寺 | １丁目 | 2,242 | 1,089 | 1,153 | 574 | 25.6% | 1,147 | 1.95 |
| | 連光寺 | ２丁目 | 2,296 | 1,171 | 1,125 | 240 | 10.5% | 906 | 2.53 |
| | 連光寺 | ３丁目 | 1,847 | 975 | 872 | 268 | 14.5% | 826 | 2.24 |
| A | 連光寺 | ４丁目 | 593 | 308 | 285 | 165 | 27.8% | 257 | 2.31 |
| | 連光寺 | ５丁目 | 292 | 149 | 143 | 47 | 16.1% | 138 | 2.12 |
| | 連光寺 | ６丁目 | 751 | 416 | 335 | 105 | 14.0% | 331 | 2.27 |
| | 貝取 | | 881 | 452 | 429 | 69 | 7.8% | 432 | 2.04 |
| | 乞田 | | 2,022 | 1,076 | 946 | 212 | 10.5% | 897 | 2.25 |
| | 和田 | | 7,875 | 4,089 | 3,786 | 1,024 | 13.0% | 3,546 | 2.22 |
| | 百草 | | 806 | 405 | 401 | 150 | 18.6% | 369 | 2.18 |
| | 落川 | | 1,118 | 568 | 550 | 204 | 18.2% | 468 | 2.39 |
| | 東寺方 | | 1,531 | 791 | 740 | 213 | 13.9% | 666 | 2.30 |
| | 東寺方 | １丁目 | 827 | 430 | 397 | 100 | 12.1% | 362 | 2.28 |
| B | 一ノ宮 | １丁目 | 1,957 | 1,047 | 910 | 268 | 13.7% | 1,170 | 1.67 |
| B | 一ノ宮 | ２丁目 | 1,390 | 743 | 647 | 194 | 14.0% | 812 | 1.71 |
| B | 一ノ宮 | ３丁目 | 626 | 340 | 286 | 100 | 16.0% | 325 | 1.93 |
| | 一ノ宮 | ４丁目 | 1,742 | 887 | 855 | 366 | 21.0% | 871 | 2.00 |
| A | 桜ヶ丘 | １丁目 | 1,974 | 966 | 1,008 | 625 | 31.7% | 878 | 2.25 |
| A | 桜ヶ丘 | ２丁目 | 1,328 | 611 | 717 | 442 | 33.3% | 549 | 2.42 |
| A | 桜ヶ丘 | ３丁目 | 1,204 | 558 | 646 | 393 | 32.6% | 498 | 2.42 |
| A | 桜ヶ丘 | ４丁目 | 1,549 | 764 | 785 | 400 | 25.8% | 733 | 2.11 |
| A | 和田１２６１ | | 1,893 | 918 | 975 | 540 | 28.5% | 937 | 2.02 |
| | 聖ヶ丘 | １丁目 | 2,185 | 1,064 | 1,121 | 231 | 10.6% | 820 | 2.66 |
| | 聖ヶ丘 | ２丁目 | 2,198 | 1,043 | 1,155 | 366 | 16.7% | 744 | 2.95 |
| | 聖ヶ丘 | ３丁目 | 2,524 | 1,262 | 1,262 | 477 | 18.9% | 911 | 2.77 |
| | 聖ヶ丘 | ４丁目 | 651 | 303 | 348 | 129 | 19.8% | 225 | 2.89 |
| | 聖ヶ丘 | ５丁目 | 75 | 41 | 34 | 9 | 12.0% | 24 | 3.13 |
| | 馬引沢 | １丁目 | 1,371 | 708 | 663 | 95 | 6.9% | 661 | 2.07 |
| | 馬引沢 | ２丁目 | 2,051 | 1,102 | 949 | 77 | 3.8% | 1,010 | 2.03 |
| C | 山王下 | １丁目 | 686 | 280 | 406 | 230 | 33.5% | 488 | 1.41 |
| | 中沢 | １丁目 | 936 | 495 | 441 | 77 | 8.2% | 464 | 2.02 |
| | 中沢 | ２丁目 | 1,234 | 593 | 641 | 83 | 6.7% | 486 | 2.54 |
| | 唐木田 | １丁目 | 2,221 | 1,145 | 1,076 | 224 | 10.1% | 901 | 2.47 |
| | 唐木田 | ２丁目 | 10 | 5 | 5 | 0 | 0.0% | 2 | 5.00 |
| | 諏訪 | １丁目 | 3,903 | 1,987 | 1,916 | 475 | 12.2% | 1,689 | 2.31 |
| A | 諏訪 | ２丁目 | 2,232 | 1,089 | 1,143 | 459 | 20.6% | 1,083 | 2.06 |
| | 諏訪 | ３丁目 | 1,168 | 589 | 579 | 210 | 18.0% | 455 | 2.57 |
| A | 諏訪 | ４丁目 | 2,422 | 1,126 | 1,296 | 689 | 28.4% | 1,128 | 2.15 |
| A | 諏訪 | ５丁目 | 948 | 436 | 512 | 271 | 28.6% | 451 | 2.10 |
| | 永山 | １丁目 | 1,826 | 918 | 908 | 164 | 9.0% | 900 | 2.03 |
| | 永山 | ２丁目 | 2,873 | 1,463 | 1,410 | 431 | 15.0% | 1,283 | 2.24 |
| | 永山 | ３丁目 | 4,053 | 2,019 | 2,034 | 770 | 19.0% | 1,705 | 2.38 |
| A | 永山 | ４丁目 | 4,202 | 2,064 | 2,138 | 1,006 | 23.9% | 2,065 | 2.03 |
| A | 永山 | ５丁目 | 2,213 | 1,100 | 1,113 | 489 | 22.1% | 806 | 2.75 |
| | 永山永山 | ６丁目７丁 | 8,316 | 643 | 5456 | 152 | 1.8% | 595 | 13.98 |
| | 貝取 | １丁目 | 1,950 | 1,015 | 935 | 230 | 11.8% | 798 | 2.44 |
| | 貝取 | ２丁目 | 4,169 | 2,038 | 2,131 | 495 | 11.9% | 1,422 | 2.93 |
| | 貝取 | ３丁目 | 1,313 | 633 | 680 | 192 | 14.6% | 464 | 2.83 |
| A | 貝取 | ４丁目 | 1,142 | 561 | 581 | 291 | 25.5% | 471 | 2.42 |
| A | 貝取 | ５丁目 | 824 | 410 | 414 | 165 | 20.0% | 347 | 2.37 |
| | 豊ヶ丘 | １丁目 | 2,875 | 1,489 | 1,386 | 282 | 9.8% | 1,262 | 2.28 |
| | 豊ヶ丘 | ２丁目 | 3,093 | 1,507 | 1,586 | 500 | 16.2% | 1,128 | 2.74 |
| | 豊ヶ丘 | ３丁目 | 2,022 | 969 | 1,053 | 276 | 13.6% | 679 | 2.98 |
| C | 豊ヶ丘 | ４丁目 | 722 | 341 | 381 | 208 | 28.8% | 365 | 1.98 |
| A | 豊ヶ丘 | ５丁目 | 1,539 | 726 | 813 | 475 | 30.9% | 629 | 2.45 |
| A | 豊ヶ丘 | ６丁目 | 1,046 | 498 | 548 | 251 | 24.0% | 441 | 2.37 |
| B | 落合 | １丁目 | 1,145 | 600 | 545 | 74 | 6.5% | 632 | 1.81 |
| | 落合 | ２丁目 | 856 | 443 | 413 | 66 | 7.7% | 362 | 2.36 |
| | 落合 | ３丁目 | 3,587 | 1,782 | 1,805 | 623 | 17.4% | 1,442 | 2.49 |
| | 落合 | ４丁目 | 2,837 | 1,377 | 1,460 | 461 | 16.2% | 1,145 | 2.48 |
| | 落合 | ５丁目 | 2,708 | 1,358 | 1,350 | 353 | 13.0% | 899 | 3.01 |
| | 落合 | ６丁目 | 1,615 | 822 | 793 | 213 | 13.2% | 666 | 2.42 |
| | 鶴牧 | １丁目 | 1,708 | 869 | 839 | 106 | 6.2% | 814 | 2.10 |
| | 鶴牧 | ２丁目 | 1,363 | 718 | 645 | 76 | 5.6% | 649 | 2.10 |
| | 鶴牧 | ３丁目 | 1,700 | 850 | 850 | 279 | 16.4% | 587 | 2.90 |
| | 鶴牧 | ４丁目 | 940 | 447 | 493 | 180 | 19.1% | 320 | 2.94 |
| | 鶴牧 | ５丁目 | 2,395 | 1,163 | 1,232 | 396 | 16.5% | 826 | 2.90 |
| | 鶴牧 | ６丁目 | 1,979 | 982 | 997 | 150 | 7.6% | 701 | 2.82 |

これらデータを分析すると、これまで町別データでは見えてこなかった各地区の特性や相違を把握することができる。

## 2.2.世帯当たり人員が２名以下の地域

関戸４丁目、一の宮１～３丁目、落合１丁目、南野１丁目は世帯当たり人口が２名を以下となっている。一人住まいの方が多いと思われる地域である。

関戸４丁目は聖蹟桜ヶ丘駅前の繁華街、一の宮１～３丁目もその周辺地区。落合１丁目は多摩センター前の繁華街である。

図 1. 一の宮１～４丁目の男女別・年齢別人口

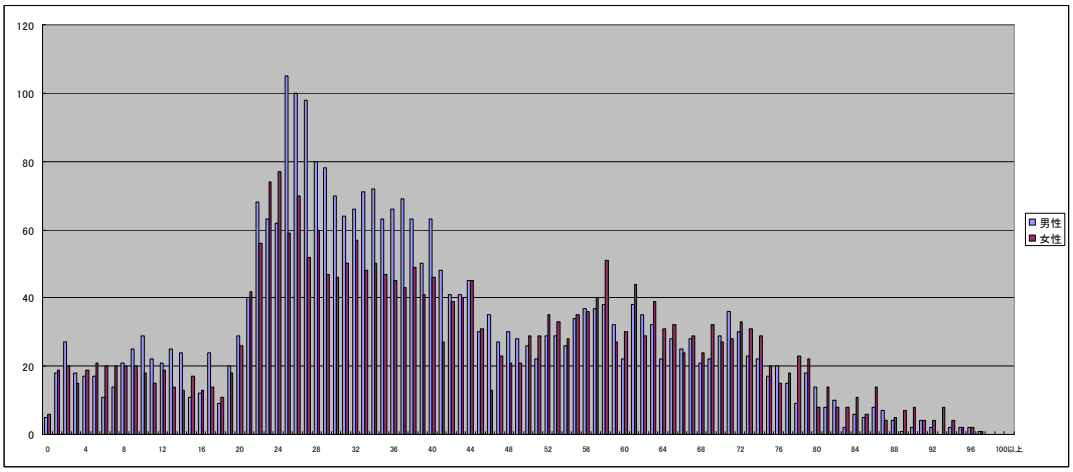



図１で興味深いのは、居住者の年齢が二つの山で構成されているが、若い世代～中年の人数が多く「団塊の世代が多く、エコー効果でその子どもの世代が次に多い」というパターンはここでは見られない。21 歳～46 歳という第一の山、57 歳を一つ峰とするなだらかな第二の山から構成される。

また、注目されるのは、第一の山では 23～24 歳を除き、男性が圧倒的に多く、第二の山では男女ほぼ同数の分布となっている。若い一人暮らしと中高年と一人暮らしが都市サービスを求めて暮らしているが、その男女比は年齢層によって異なる人口構成と言えるだろう。

## 2.3.高齢化率の高い地区

多摩市では、ニュータウン地域以外にも桜ヶ丘などの高齢化著しい地域がある。

本調査で焦点を当てるニュータウン地域で高齢化が進んだ地区としては「諏訪・永山」と一括りにされる地区がある。しかし、諏訪でも区画整理開発地区を含む１丁目と、諏訪団地がある２丁目～３丁目、都営諏訪団地のある４丁目～５丁目では明らかに高齢化率に差があることがわかる。

その差は、年齢分布を見ても明瞭である。諏訪２丁目（図２）は 30 歳代、55～65 歳代の二つの峰からなる分布で、どちらの山も各年齢の男女数はばらついている。しかし、諏訪３丁目（図３）を見ると、明らかに 55 歳以上の山が大きく、しかも女性の数が多い。どちらも世帯当たり人員は 2 名程度なので、中には独居の方も多いものと推測される。

図２．諏訪２丁目の男女別・年齢別人口

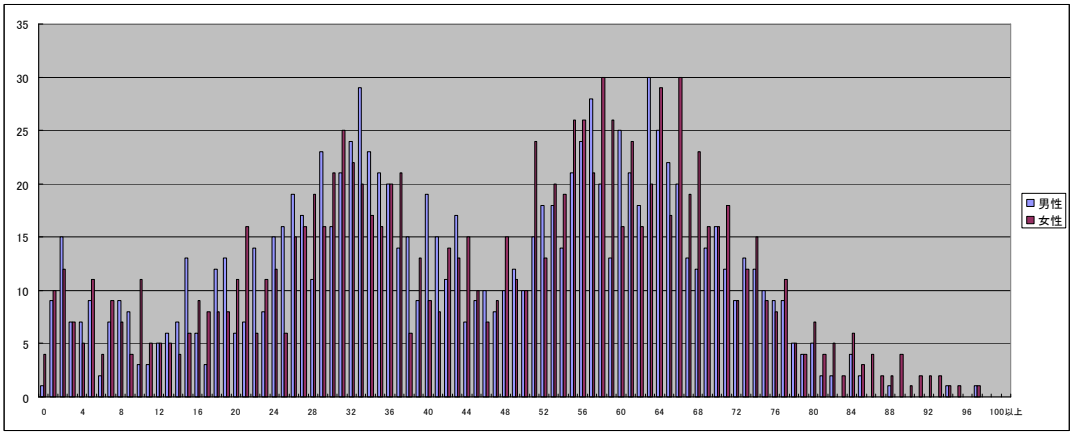
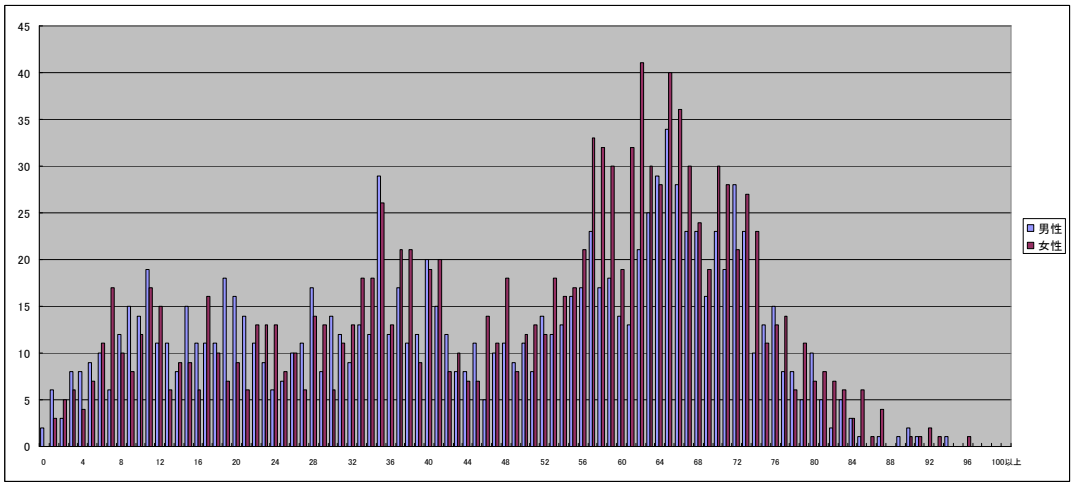



図３．諏訪４丁目の男女別・年齢別人口




同様のことは、貝取の中でも１～３丁目と、４～５丁目の差や、豊ヶ丘１～３丁目と、４～６丁目の差にも現れている。

中でも豊ヶ丘４丁目、５丁目の高齢化率は 28.8%、30.9%と深刻である。

豊ヶ丘４～６丁目はニュータウン地区の南端に当たり、豊ヶ丘団地と呼ばれる場所であ

る。多摩センター駅からは直線距離で約 1.4 キロメートル離れている。豊ヶ丘はマスタープラン上では第８住区で、1976 年の町開きで、1971 年に町開きされた諏訪・永山の次に開かれた場所である。諏訪・永山団地の平均住戸面積が 50 平米であるのに対し、豊ヶ丘は 74 平米となっており、３ＤＫ～４ＬＤＫの間取りとなっている。

図４．豊ヶ丘４丁目の男女別・年齢別人口

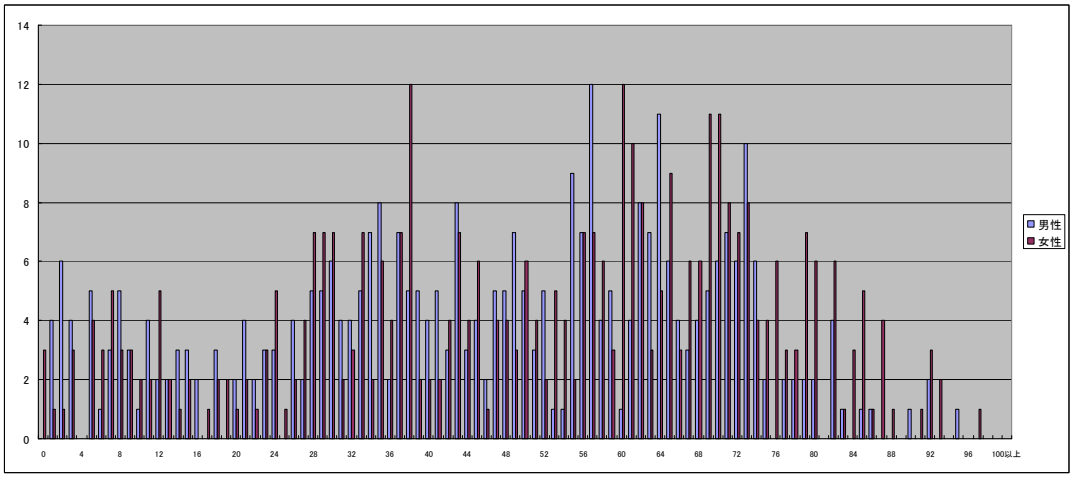



図５．豊ヶ丘５丁目の男女別・年齢別人口

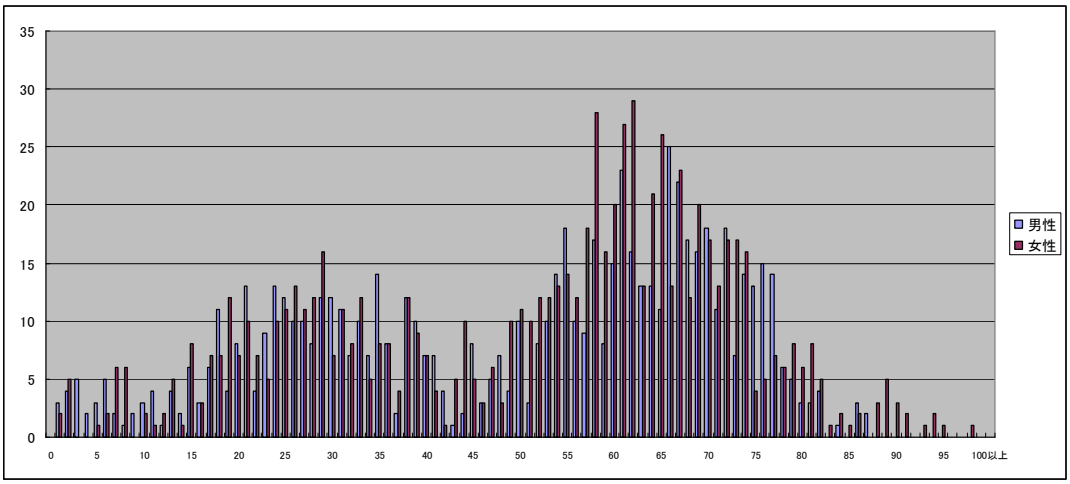


図５．豊ヶ丘６丁目の男女別・年齢別人口

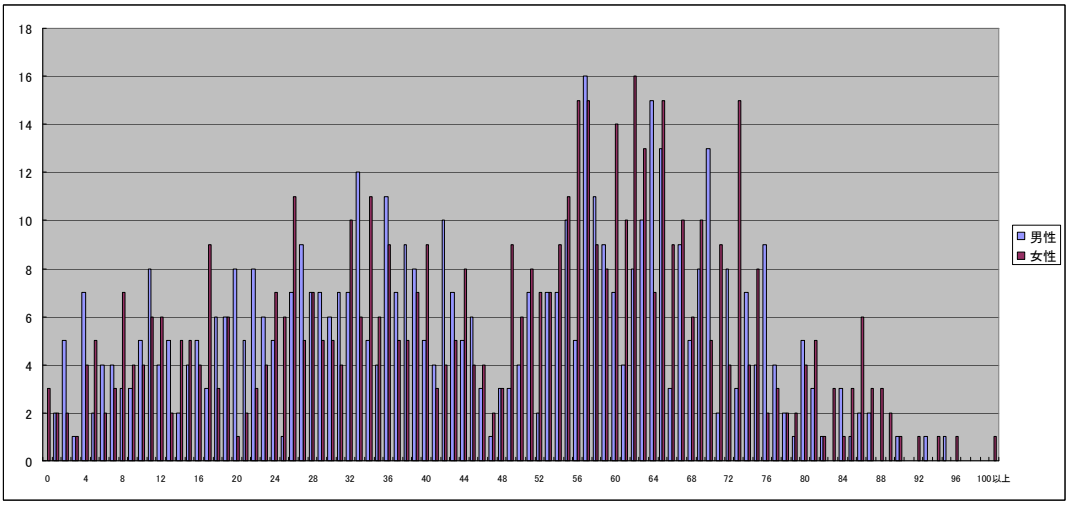



図３～５を見ると興味深いのは、豊ヶ丘４丁目と、５・６丁目は明らかに人口分布が異なる点である。また５丁目と６丁目とでも微妙に異なる。町開きの年は同じでも、住戸の面積・形状や、賃貸・分譲の違いなどがあり、このようなバラツキが生じているものと考えられる。

また、豊ヶ丘５丁目の 40 歳代人口の落ち込みは激しい。

表２．豊ヶ丘町（１～６丁目）の 2004 年度人口動態

| | 転入数 | 転出数 | 転入－転出 |
|---|---|---|---|
| 総数 | 450 | 615 | −165 |
| 年少人口 | 37 | 76 | −39 |
| 生産人口 | 368 | 501 | −133 |
| 老齢人口 | 45 | 38 | 7 |

2004 年度の豊ヶ丘町の転入出数は△165 名で、そのほとんどが生産年齢人口と、その家族である。逆に老齢人口は７名増となっている。

表３からも明らかな通り、△165 名という数字は永山、貝取に次ぐ数字で、際だっている。

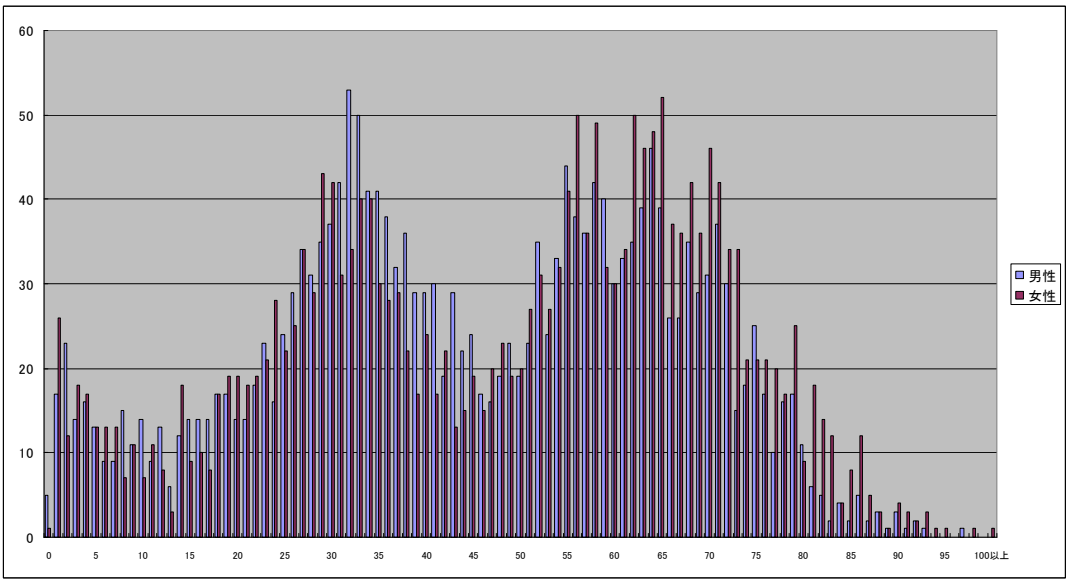
表３．多摩市各町別転入－転出人数

| | 総数 | 年少人口 | 生産人口 | 老齢人口 |
|---|---|---|---|---|
| 全市域 | −824 | −57 | −829 | 62 |
| 関戸 | 12 | 7 | 23 | −18 |
| 連光寺 | 7 | 9 | −20 | 18 |
| 貝取 | 10 | −2 | 9 | 3 |
| 乞田 | −20 | −7 | −9 | −4 |
| 和田 | 84 | 36 | 28 | 20 |
| 百草 | −8 | 2 | −10 | 0 |
| 落川 | −21 | −11 | −11 | 1 |
| 東寺方 | 11 | 2 | 6 | 3 |
| 一ノ宮 | −39 | 1 | −29 | −11 |
| 桜ヶ丘 | 18 | 26 | −3 | −5 |
| 和田１２６１ | −55 | −15 | −26 | −14 |
| 聖ヶ丘 | −66 | 17 | −89 | 6 |
| 馬引沢 | −60 | −34 | −26 | 0 |
| 山王下 | 37 | 2 | 30 | 5 |
| 中沢 | −6 | 3 | −8 | −1 |
| 唐木田 | −35 | 1 | −44 | 8 |
| 諏訪 | −87 | −20 | −81 | 14 |
| 永山 | −194 | −40 | −180 | 26 |
| 貝取 | −169 | 4 | −180 | 7 |
| 豊ヶ丘 | −165 | −39 | −133 | 7 |
| 落合 | 95 | 26 | 73 | −4 |
| 鶴牧 | −50 | −5 | −49 | 4 |
| 南野 | 19 | 9 | 12 | −2 |
| 東寺方3丁目 | −30 | −6 | −19 | −5 |
| 和田3丁目 | −36 | −9 | −27 | 0 |
| 愛宕 | −76 | −14 | −66 | 4 |

一番人口が転出しているのは△194 名の永山であるが、老齢人口は 26 名が転入してきている。永山、貝取、豊ヶ丘、諏訪は生産年齢人口の転出が激しく、永山、諏訪は、老齢人口の転入が多い。永山、諏訪は、以前よりの住民の高齢化と高齢者の転入により、全体人口が高齢化しているのである。

高齢者の転入が多い永山で4200名が居住している永山４丁目の人口構成が図６である。

図６．永山４丁目の男女別・年齢別人口




この図６は 64 歳と 32 歳をピークにもつ双峰型となっている。ただし、乳児の数が多く一つの峰をつくっていることが特徴的である。この差は、次の図７と比べると明瞭である。32 歳の峰の出産によるエコー効果とも言えるし、１歳、２歳となり人口が減っていくのは、32 歳以降人口が減っていくことに重なっている。子どもの出生を契機に、転出者が多いことが想像できる。２～３ＤＫ、平均住戸面積が 50 平米では、子育てにはかなりの苦労を伴うであろう。

一方、ニュータウン地区の中でも 95 名と、著しく人口が増えているのが落合である。表１を見ると、落合１丁目は多摩センターの周辺地区で世帯当たり人員が非常に少ない。また、落合５丁目は世帯当たり人員が 3.01 名とニュータウン地区の中では唯一３名を越えている。落合５丁目は、エステート落合、ホームタウン落合、タウンハウス落合グリーンコープ落合など、中層集合住宅となっており、住戸面積も諏訪・永山の倍近くになっている。

図７．落合５丁目の男女別・年齢別人口

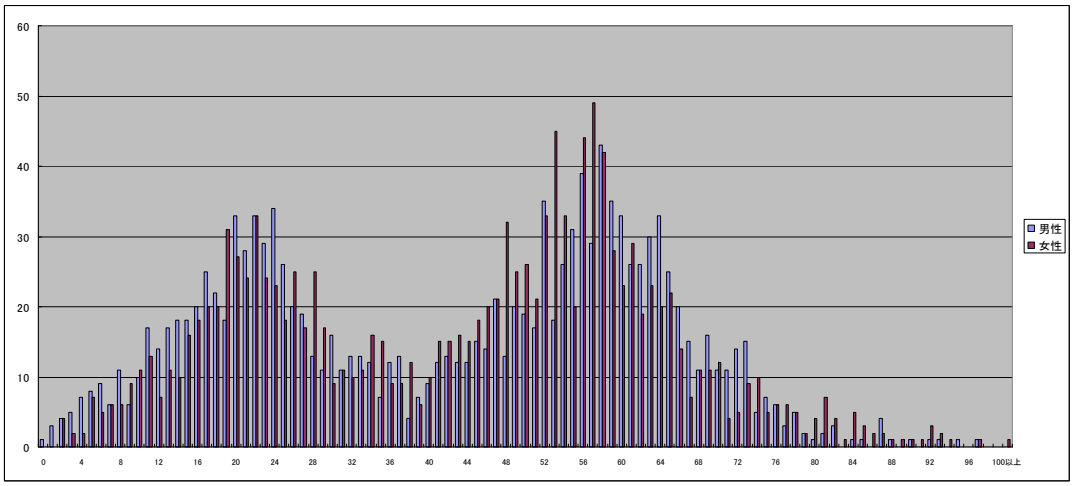



図６の通り、落合５丁目の年齢別人口構成は 58 歳と 22 歳を二つのピークとする、きれいな双峰型となっている。典型的な家族居住型の構成といえるだろう。落合５丁目の高齢化率は 13%であるが、あと７年を減るとこのピーク人口が高齢者となり、現在 22 歳のピーク人口は結婚等による世帯分化のため減少することも予想される。38 歳人口が谷底となっていることからも、このままでは今後急速に高齢化が進むことが考えられる。

## 2.4.まとめ

以上、多摩市の年齢別人口構成と人口動態の、町丁目別特性を概観した。ニュータウンのような計画市街地においては、住戸形態・町開き年代・分譲と賃貸などの差と、町丁目が重なっているため、町だけではなく丁目までの特性把握が不可欠である。

例えば、愛宕は１～４丁目まであるが、１～３丁目は都営愛宕団地等があり、高齢化率が 20%を越えている。ところが、愛宕４丁目は高所得者向けの高居住水準の集合住宅が位置しており、稼得能力が高く年齢も若い層が入居していると考えられる。

また、本調査においては高齢化率も「65 歳以上」と通常の年齢区分に依拠し集計しているが、このようにいわゆる「高齢者」が多数かつ多様に暮らしている地域においては、「65 歳以上」という一種のラベリングを行うことで把握が難しい現象も発生する。年齢区分選択の妥当性については、今後の課題としたい。

本調査では、「ニュータウンの安心づくり産業の提案」を目的にしているが、主要な問題は高齢化に伴う諸問題と考える。このため、主な調査対象地域は、諏訪、永山、貝取、豊ヶ丘の中から選ぶこととした。

# 第３章　安心と不安の風景

## 3.1. 話をうかがった人

インタビューの対象は以下の 10 回合計 12 名である。

（1） 1950 年代前半生まれの女性。出産を機に専業主婦に。多摩ニュータウンへは 1982 年転入。子ども２人あり。

（2） 1950 年代前半生まれの女性。多摩ニュータウンへは 1984 年転入。最初、A団地。子ども２人あり。

（3） 1940 年代後半生まれの女性。多摩ニュータウンへは 1982 年転入。ニュータウン居住者向けの地域情報誌を発行して現在にいたる。子ども３人あり。

（4） 1950 年代生まれの男性。多摩ニュータウンへは 1993 年転入。ニュータウン内で起業し、現在は他地に事務所移動。独身。

（5） 1960 年代中頃生まれの女性。多摩ニュータウンへは 1999 年転入。稲城市在住。子ども２人あり。

（6） 1950 年代生まれの女性と男性。高齢者のための移動サービスを NPO として提供している。

（7） 1926 年生まれ、79 歳の男性。A団地、賃貸に独居。

（8） 1938 年生まれ、68 歳の女性。B団地の賃貸に独居。

（9） 1929 年生まれ、76 歳の女性。A団地の高齢者向け賃貸住宅に独居。

（10）コーポラティブ住宅に住む二人の女性（主婦・独身）

インタビュー対象からうかがった一つひとつのコメントは、解釈のしようによっては二つも三つもの意味をもっていることが多い。例えば、「義理の母親とは同居しないで、隣の棟で近居してもらった」というコメントだけでも、同居では耐えられない子と母親の「距離感」や、「今から振り返る、老親介護の予感」、さらには義理の娘として親の面倒をみなくてならないという「社会規範の意識」等を読み取ることができる。こうしたコメントの多義性を解釈しながら、浮かび上がってきた問題を読み取って紹介する。

## 3.2. 同居の不安

何人もの方の口から出たのが、同居に関するトピックスである。

同居の不安として語られることが多いのは、結婚している女性の場合は親との同居、そして配偶者との同居にまつわるストレスである。

まず親との同居について見てみよう。

現在 54 歳の主婦は、42 歳の時に、夫の母親を田舎から呼び寄せ同居する意を固めた。これを機に、それまでの多摩ニュータウン内の都営住宅から、同じニュータウン内の 4LDK 分譲住宅に住み替えた。子ども２名も合わせ５名で暮らすことになったのだが、その時の部屋選びで考慮したのが親との生活動線だという。

| |
|---|
| 選んだ家は、母と生活動線が交わらないようになっている。交わっていたら、選ばなかった。健康な時というのは、べたべたする必要はない。家には逃げ込める場が必要だ。 |

これは、親との間に生じがちな無用な行き違いをうまく回避するために、うまく対策を講じた例と言える。

| |
|---|
| 同居を始めた頃、（母親に）友達をつくってもらおうと思って、福祉センターに車で通った。今は巡回バスがある。友達がたくさんできた。寿大学などいろんなメニューがある。やはり、呼び寄せられてきたような同じ境遇の方と友達になるみたい。友達が広がってよかった。福祉センターの企画でバス旅行があり、よく行っていた。市民合唱団にも楽しそうに参加していた。 |

これも、福祉センターをうまく活用して、母親の生きがい支援を図り、家庭への負担を減らそうという対策と言えるだろう。親との同居がもたらす不安をよく自覚している例だ。

同居する親と子の関係は、どうしても水平的とはいかなくなる。

| |
|---|
| 義母のような世代は我慢することに慣れている。一度、義母がバスでケガをしたことがある。バスの中で、真後ろに転倒した。かなり痛かったようで、バスの運転手も、救急車を呼ぼうとしたが、我慢をしてしまい、降りて歩いているうちに脂汗が出て、とうとう倒れてしまった。このときばかりは我慢しないでくださいと強く言った。誰も我慢したことをほめてくれないので、義母もちょっと考えなおしたようだ。 |

この発言からは、子の側の大変さが伝わってくると同時に、同居する親にも我慢を強いてしまうという、互いが規範通りに行動する結果生み出されてしまう緊張関係がうかがえる。

親子間の同居に不安を感じたり、子と親の間に対等ではない関係が生まれてしまったり、意識してしまう例は、この世帯だけではなく、他の方からも語られた。

| |
|---|
| 子どもも嫁に出した。そんな所にいくわけにはいかない。 |

これは 78 歳の独居男性の言葉だ。「子どもの世話になりたくない、なるわけにはいかない」という言い方には、「本当は世話になりたい」「相手も迷惑するし、こちらも窮屈になる」「親は子どもに迷惑をかけるべきではない」という、現状と規範の間を動く気持ちが現

れているとも考えられる。

ある 76 歳の目の不自由な独居女性は、次のように言う。

| |
|---|
| 人に迷惑をかけるのが、一番自分の負担になるから、なるべく迷惑かけないようにしたいと思うけど、そうも言っていられなくなってきた甘えるときは、甘えなさいと言われるけど、長年ひとりで暮らしてきたから、なかなか人に頼めない。 |

この女性は独居だが、「迷惑をかけたくない」が結果として同居者双方の悩みの種になることは想像に難くない。かといって、甘えてしまうと、それも悩ましい。今後、親子同居者間の不安は大きな問題となるだろう。

同居の不安は親子間だけではない。配偶者間でも起こりうる。

ある主婦は、

| |
|---|
| 主人が 1 週間家にいたとき。すごいストレス。主人が引退して戻ってくることは不安でどうしようかと思う。 |

と言う。とはいえ、最後は家族の規範に則ったコメントを語り、発言に調和をもたせる。

| |
|---|
| 夫とは将来もうまくやっていくと思う。もう何十年も色々やりながら、やってきたのだから。 |

なぜ家族が同居しなくてはならないのかという実感が、子育てを過ぎると失われてしまう。愛情で結ばれた絆もあれば、夫よりも仕事の絆を選択する女性が出てくることもある。

### 3.3. 独居の安心と不安

同居者も、高齢になるに従い、独居になる。独居高齢者の中には、独居の安心と不安が混在している。

79 歳でA団地の分譲で暮らしている独居の男性は次のように語る。この方は海軍航空学校へ行って、復員後もいくつか職を変え、子どもたちを育て上げてきた。だから、昔の暮らしぶりもよくご存知だ。

「一人暮らしというとたいへんでは？」という質問には、次のように答えられた。

| |
|---|
| そんなことないない。考え方による。のんびりしているから、苦痛にならない。ここ（福祉亭）があるからかもしれないね。ここに来ればお昼つくってくれるじゃない。朝は家でパンかなんか食べて。昼はここで食べて、夕方までここでぶらぶらしている。一日つぶせるし。あと、老人会に入って、あちこちと遊びに行ったりしているんで。そんなに、寂しいと感じたことはない。同じ一人住まいでも、家の中に閉じこもるとだめやね。そういう人が多い。そういう人をどうやって連れ出すかが問題で。うちの同じ棟の人で |

も、お昼に弁当を配ったらどうかという人もいる。私はそれ反対しとる。弁当配るということは閉じこもる人をますます増やす。もっていけば外に出る必要ないからますます動かん。それよりも、外に引き出す方法を考えた方がいいんじゃないのと言っているんだけど。その人も。年寄りのことをいろいろ考えて活動してくれているので。ここまで足を運んで食べに来るんでもいいんだけど。

*※福祉亭：多摩ニュータウン内の高齢者を対象に喫茶・食事提供サービスを行っているＮＰＯ。*

一見すると人生を達観しているように思えるのだが､｢何をやってもしょうがないというあきらめ」と「安心」がないまぜになっている。

一方、夫と早くに死に別れ、女手一つで子どもを育て上げ、今は独居という 68 歳の女性もいる。この方の場合は、生活もつつましく、一人暮らしは何の苦にもならず、それが日常になっているようだ。

娘夫婦が仙台に行く時、一緒に来てもいいと言われたんですけど、私がいやだと言ったんですよ。娘に、やった子どもに迷惑はかけたくなかったし。馴れない所に行くよりは、勤めていてそんなに近所に友達もいないですけどずっと住んでいればあれするだろうと思って。逆に、やっとほっとして自由にできるという部分もありますよね。

この女性はいま年金で暮らしをたてながら、週２回のボランティアに通っている。

「昔良かったと思っていた居住環境が、いま不満に感じられることは？」という問いには、次のように答えている。

まあ、他の所では、ソファーベッドを置いている人もいますけど、私は布団で寝て、たたんでいますし。部屋の中も、キッチンセットなど置かずに、こたつで、夏はそこに台を載せて座ってやっていますけど。年をとると、椅子にした方がいいかな、買ったほうがいいかなと思う時もありますけど、うーん、ふんぎりがつかないですね。もうちょっと足が変になればまた違うんでしょうけど。立ったり座ったりが大変だとか、布団の上げ下ろしがたいへんだとか、なったら考えるんだろうけど。いつかは変えないととは思っていますけど。

一方、現在 76 歳の独居女性は、

ひとりになると、年中不安。地震のときとか。風呂のときに、あっちこっちにボタン（非常呼び出しボタン）がついているといつもみてしまう。こんなときになんかあったらと思ってしまう。ボタンは全部で 4 箇所ぐらい。これは入ったときから付いていて、その後、1 ヶ月 1670 円で、使用できる。すぐ答えてくれる。間違って押してしまったことがあって、すぐどうしましたと連絡が入る。あれは心強いです。反応がないとタクシーが飛んできてくれるみたい。

と、不安を覚えている。そして、ボタンの向こうにいる、外の人々の存在に心強さを感じている。

### 3.4. 移動の不安

また、ここで出てきたのが、移動の不安である。79 歳の独居男性が言うには、老人会でも移動が苦で出てこられなくなった人がいるという。

> 老人会でも 90 歳過ぎた人もいるけど、２人、なかなか出てこなくなった。やっぱり、歩くのが大変なんだろうね。杖ついているし。有料賃貸住宅なら、だいたい１階か２階かに住んでいるはずなんだけどね。

移送サービスの NPO メンバーはこう言う。

> 多摩ニュータウン 30 歳後のことが考えられていない。坂は多いし、福祉車両を通そうと思っても通らない。道路斜面斜めになっているし。

> 私から見ると、多摩ニュータウンは若い人のために設計したまちで、年をとってからのことが考えられていなかった。

> 作り替えできないですよ。いざ建て替えようとしても、60 ではどこの金融機関でもカネ貸してくれないですしね。だから、財力ある人は、ほとんどニュータウンを出て行ってしまう。それで、外国人がぽこぽこと賃貸住宅に入ってきているでしょう。これが、20 年したらたいへんなことになる。

さらに、移動が不自由になった方についても、

> みなさん「たいしたことない」と言います。でも、行ってみると、段差がダーとあったり。お子さんの障害も「大丈夫です」と、行ってみたらすごく大変だったり。一人ひとりみんな違う。

さらに、移動の安心・不安について、現場ならではの適確な発言をしている。

> 移動に目をつけたのは、いい目の付け所だと思う。アンケートしても出てこないのは、外出できなくなったらあきらめる。ここに依頼のある人は、外出しようと思っているわけで。ノリタク実験で感じたけど、まずあきらめてしまう。そうすると、「この町から出て行くか、外出しないか」という選択をするので。移動は、介護保険からもサービスとして取り入れられなかったし。いま支援費も介護保険と一緒にとなったら、また問題となるんですが。移動は、権利として一番遅れているんですね。

手段がないと思うことが、あきらめを招き、「この町から出て行くか、外出しないか」という選択を課してしまうというのだ。

### 3.5. 子育ての安心と不安

70 年代～80 年代にここに越してきた主婦に話を訊くと、共通してうかがえるエピソードが、結婚する時に「仕事か結婚かの選択を迫られた時代だった」という話題と、ニュータウンは「歩車分離がされていて、子育てには安心だった」という答えだ。ベランダで洗濯物を干していても、上から見晴らせるのが安心だったという答えもあり、まさにニュータウンが子育て期の若夫婦向けにつくられていることが実感された。

子育て奥さんが多いだけに、助け合いが必要な場所ではコミュニティも生まれてくる。ただ、都営住宅時代には存在した助け合い関係が、分譲に移ったら薄くなったというコメントも見られた。

子育てについては、誰もが苦労した点を挙げていただいた。いじめに遭遇したり、学校との関係に苦労した母親もいる。また、進学の悩みも小さいとはいえない。

### 3.6. 親の介護の不安

親の介護は、同居の問題と密接に関連する。別居していても親の介護に直面する可能性は高いわけで、そこには人それぞれの不安がある。

55 歳の主婦は次のように述べた。

> 父母は元気だが、最近母の具合が悪い。もともと体はあまり強くない。現在、父が食事をつくっている。母は食事をつくる気力がなくなってしまったようだ。でも、基本的には父母が自立して生活をすることが基本で、私はそれをサポートするという姿勢。

> 父は、母が昔から体が強くないので、少し前から週１回は食事をつくる習慣をつくって、現在のようにできるように対処していた。

と述べた上で、自分もホームヘルパー２級の資格をとったという。自ら親の介護を想定した対策をとった例といえる。

また 30 代後半の女性は、実母を昨年亡くし、それまで別居していた実父をどうするか決断を迫られた。最初は同居をした。

> 母が急死だったので、父はそのとき入院していたこともあって、真っ白になってしまっていたので、３～４ヶ月ぐらいうちにいた。大変だから、一緒に住もうと提案した。夫もよいといってくれたし。でも、父はやはり自由にやりたいということで実家に帰っていった。孫も最初はよかったが、最後は少しうるさがれていたから、そういうこともあるかもしれない。

この結果選んだのは、父が実家に戻り、一人で暮らすという別居だった。ただ、実家が

車で 30 分ほどの場所でもあったため、「近居」を選んだことになる。

週間に 1 回ぐらい訪れる。あとは毎日電話をする。携帯電話は買っても持ち歩かないので、携帯の機能を果たさない。父は何もできないので、私がある程度のおかずなどをつくって、持って行く。料金の振込みなんかをできないので、私がやっている。母がいたころは、自分は働いてお金を入れて、一定のこずかいをもらい、その中でやればよかったから、家計をやりくりするなんてことはしたくないと言う。

### 3.7. コミュニティの安心、不安

コミュニティとは、一口に言えば、助け合いのしくみだ。自助・共助・公助でいう、共助の機能を果たすサポートネットワークといってもいい。家族内で助けあうことができず、かといって、行政の支援がない場合、隣近所や何らかの人のつながりで助け合いをするしかない。この不在がいつも多摩ニュータウンの問題になるのだが、果たしてそうか。

54 歳の主婦は、年に落合に引っ越してきた。その時、このように感じたという。

31 歳の時、C 団地に引っ越してきた。賃貸の 3DK で 1F。都営。ここには下町風のコミュニティがあり、なつかしい。

55 歳の主婦は、自治会がないことに不安を訴える。

自治会ないので、ゴミ置き場の前で青空会議になってしまう。無いで済むならそれにこしたことはないわね、と言う人もいた。こういうのはこれ 1 回にしたいなあ、という男性もいた。こういうのは不安。

地域情報紙会社の役員を務める 58 歳の女性はニュータウンの初期からの住民だ。地域情報紙を起業した経緯をこう語る。

子供の同級生の家族が一家心中をした。見つかったのは、死後 1 週間たったころで、近所が誰も気づけなかった。このことがとてもショックだった。もっと顔のみえる地域の関係がつくれないかと考えた。そのころ、大阪に住む友人の編集者が、千里ニュータウンの近くで地域情報誌をつくっていた。これの多摩ニュータウン版をつくれないかと考えた。

そして、実際に取材すると次のような近所づきあいも見えてきた。

入居８年目の主婦のグループで、毎年かならず１回旅行に行くグループを取材した。彼女たちは、同じ棟の同じ階段をつかう近所。だから同じ間取り。彼女たちの話はいつも階段で行う。決して家に上がりこむことはない。彼女らのほとんどが仕事を持って自立している。その中で、ベタベタしすぎない関係を保っている。でも、旅行に行けば、朝まで語り合う仲間なのだ。

これが一世代以上前の風景だった。

ここにも「自立」を尊ぶ気風が見える。

### 3.8. 仕事の安心、不安

ニュータウンと同様、ベッドタウンの色彩が強い住宅地は郊外にはどこにでもある。そうした郊外にも、商店街等を中心にちょっとしたパートの口がある。ニュータウンの働き口はどうだろうか。

多摩ニュータウンで昔から多いのは、美容室と学習塾

とある主婦は言う。どちらにしても、ちょっとした雇用を吸収するには及ばない。

一方、ニュータウンで起業した 46 歳の男性の話は興味深い。

主婦に仕事を頼むと、たとえ技術的にはプロであっても、「子どもが泣いてしまうから、納品できませんでした」と言う。その場合は替えを探さなくてはならない。主婦に頼むと、５割のリスクヘッジが必要ということ。子育てでいい親になりたい面と、仕事のプロジェッショナリティでコンフリクトがおき、だいたいは子育てをとる。

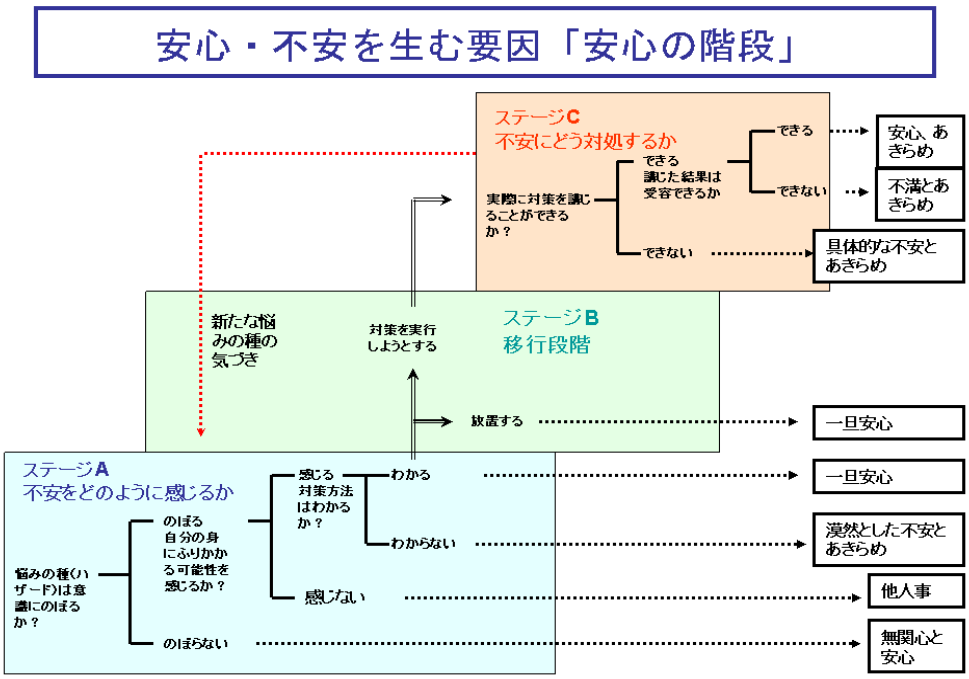
女性のキャリアは、「子供のそばにどれだけいたいか」にかかっている。「３歳までは」みたいなことにどれだけこだわるか。

当時はいまのようにファミリーサポート制度もないし、保育園も少なかったけれど、それでも仕事だからと割り切れる人でないと。昔の農家でも、子どもが泣いても、病気でも、それでも米つくって、しょうがねーなと。でないと喰っていけないんだから。そういう面では、９７年頃から見ると、ニュータウンの子育て環境はよくなったと思う。問題は、仕事への意識の持ち方だと思う。

雇用者側から見た働き手の観察は厳しい。「家が第一で、仕事はその次」という程度のパート志望者と、仕事第一を望む雇用者側との間でミスマッチが起きる。両者がバランスできるような多様な小売店や飲食店などがあると違うのだが、それは少ない。

## 3.9. さまざまな安心に影響を与える要因

以上、いくつかのコメントを取り上げた。生活の場面で感じる安心・不安は、人によって様々であるし、同一人物でも場面によってはニュアンスの異なることを述べる。こうしたインタビュー内容を整理すると、安心と不安を生む要素は、直接的には「不安の種の認知」と「不安の対処方法の認知・実行可能性」である。この二つを組み合わせて、以下の図のように整理してみた。




「親の介護」という不安を例に、上図を説明する。そもそもそのような出来事をまったく意識していない人もいる。こういう場合は無関心であって、悩みを意識していないために「安心」でもある[3]。または、意識していても、「まだ遠い未来のことだろう」とか「うちに限って」というように、自分との関わりを感じられない人もいる。そういう時は「他人事」と感じ、不安はほとんど感じないだろう。

また、親の介護が自分自身の問題と感じられても、家庭で介護するのか、施設で介護するのか、デイサービスを利用するのか・・・等々、どうしてよいのか対策が分からない人もいる。こういう時は漠然とした不安やあきらめを生む。

[3] 無関心なことと、良い悪いは別の問題だ。例えば、多摩ニュータウンの住宅老朽化などは、非常にゆっくりと進行するわかりにくい悩みの種であって、最初からそれを見通していた人など少ないだろう。むしろ、いまあまり気づかれていない悩みの種を、明らかにすることも、本調査の大事な役目と考えている。

対策がわかれば一旦は安心する。ただ、緊急な悩みでなければ、ここで対策に移らずに放置し、一旦安心してしまう人もいる。対策に移る人は、その対策が実行できるかどうかという問題に直面する。対策が分かっても、それを実行できるかどうかは、家族の協力や家計の余裕、行政の支援体制などによっても異なり、実行ができなければ、具体的な不安とあきらめを生む。

さらに、対策が実現しても、その結果を自分が受容できるかどうかは別問題だ。受容できなければ不満とあきらめを生むし、受容できてもそれは安心と不満という要素の間のどこに位置づけられるかはわからない。そして、対策を講じているプロセスあるいはその結果によっては、新たな悩みの種に気づくことも多い。

これらのプロセスは「ステージ A. 不安をどのように感じるか」「ステージ B. 移行段階」「ステージ C. 不安にどう対処するか」という三つのステージ間の相互関係と捉えられる。ステージ内の要素やステージ間の関係を変えてやることで、安心度を変化させてやることはできるだろう。

ここで注意したい点は、対策方法まではわかっても、その方策を講じたり、実現する段階で新たな「悩みの種」が気づかれ、新たな対策を講じる必要に迫られたりすることもある。安心を生みながらもこのフィードバックが働き、いろいろな対策方法をその人が蓄積していくことが、その人の不安への対応力を増すことになる。これは、連携する周囲の人々・組織・行政についても同様である[4]。

このような図式を、本調査では「安心の階段」モデルと呼ぶことにする。

このモデルを使い、A～C のステージがどのような連鎖関係をもち、どのような安心感・不安感・あきらめ感を生んでいるか、そして、どのような介入が有効・無効なのかについては、最終章で総括する。

## 3.10. コメントから読み取れる問題のポイント

（1） 結局、一生レベルの悩みについては、いくら事前に様々なケースを想定して対策をたてても解消され安心できることはほとんどない。むしろ、悩みの種が意識された時点で、短期的な対応を試行錯誤することが、後から振り返ると「ああするのが良かったのだろう」と思える程度の安心感につながる。

（2） 自立という社会規範を重視する。この自立は、「他所の人には世話になりたくない」という意味で、これは親子の間でも同様である。自立を尊ぶと「人に頼りた

[4] 以上は、一言で言えば「ハザードにより異なるリスク認知と評価・行為」という問題になり、認知と評価や行為に影響を及ぼす政策を探ることが課題となる。ただ、今回は聞き取り対象者の「語り」「現在の自らの関わりの中で物語化された体験」が重要と考え、図のような枠組みを設定した。

くない」「迷惑をかけたくない」「我慢する」という気持ちにつながる。元気な時は何でも自分でこなしてしまい、社会的コストを低める力になるが、加齢に伴い支え合う生活が必要になった時には、他者の支援を拒む気持ちに結びつきやすい。「他人をよせつけない自立」ではなく「助け、助けられるを許容する自立」が求められるのだろうが、このような関係をつくる場は多摩ニュータウンにおいては非常に限られている。「自立したい」という規範と、「高齢化＝体力の低下＝自立する力の減退」という実態との関係が、ねじれているように思える。

（3） 家族が同居して暮らすのは、「いつの時代にもある当たり前のこと」ではない。子育ては、親同士が共同して家族を維持する要因となるが、子育て期を終わると、助け合うために同居する家族そのものが、不安を呼び起こす悩みの種になっていることもある。

（4） 一人か二人で自立する生活に価値が置かれているにもかかわらず、まちの住環境はそれにまったく対応していない。

（5） 移動の悩みは確実に存在する。これは、引きこもりやコミュニティ形成に密接に関連するが、まだ多くの人は意識にのぼらない。または、のぼっても、あきらめになっている。

（6） コミュニティ（助け合い組織）が弱い。近隣、地縁ではなくても、趣味の仲間、会社 OB の仲間など、いろいろな選択縁があると考えられるが、それについては不明。

（7） 事業者は、職種によってはプロの成果をパートに求める場合があるのに対し、パート希望者の側は時間の柔軟な働き方を求める場合が大きい。このことは、事業者と働き手の間の「求める働き方の違い」というミスマッチの存在を予想させる。専門性を発揮したいパートもいるが、そこそこの仕事で柔軟に時間を使えることを重視するパートの方も多い。

（8） 不安の意識にのぼらないほど、不安を意識させる選択肢がない。加齢、親の介護、移動などの不安は、誰にでもやってくる悩みである。しかし、「心配してもしょうがない」と答える裏に、選択肢がないことへのあきらめがある。

# 第４章　不安に対処するためのサポート機能

## 4.1. 暮らしのサポート機能類型化の試み

「暮らしの安心マネジメント」は、各人のライフイベントに応じて、生活資源を充当することで不安に対処し、安心を得るプロセスである。

生活資源のうち、自分で所有していないものや創造できないものは、全て他者の所有するものか､彼らが創造するものである｡それらを不安解消のために充当するということは、その他者からサポートを受けることである。この他者は、家族であっても、企業であってもいいので､「暮らしの安心マネジメント」は、ほとんどの場合、サポートのマネジメントであると第１章で定義した。

このサポートは、受け手にとって、状況依存的な「機能」を生み出すことになる。第 1 章の例でいえば、高齢者が住まいに警報システムを導入することで、彼は「いつも誰かが自分を見守ってくれている」という認識を持つことになり、安心を得られる。ところが、実際に警備会社が提供しているのは､「警報システムの機械と仕組み」､「緊急の時に駆けつけるスタッフ」であって、「見守り」という実体を提供しているわけではない。それでも、高齢者という受け手は、このシステムに「見守り」という機能を見出す。つまり、サポートの機能というのは、あくまでも、受け手の暮らしの安心に関するニーズを、その時その時に満たす「心や体の動き」に対する呼び名なのである。

すべてのサポート機能は「安心」という「心的な結果」を目指すのだが、それぞれのサポートには、状況に応じて別々のニーズがあり、また、具体的な効果がある。このニーズや効果から、サポートの機能を類型化することができる。以下、暮らしに立ち現れるサポート状況を分析することで、サポートの機能の類型化を試みる。

## 4.2. 分析の対象となるサポートのシーン

分析の対象となったのは、3.1 で示したインタビュー対象者の発言である。何気なく語ってもらった暮らしの様々なシーンの中で、他者の力を借りた状況・エピソードを抽出して､そのサポートがどのようなニーズを満たし､どのような結果をもたらしたか､そして､どのような不安に対処するものであるかという視点から､その機能カテゴリーを作成した。

対象となったサポートシーンは、123 シーンある。その中で浮かび上がってきたサポート機能は、18 類型で、カテゴリーにまとめると 7 カテゴリーとなった。

## 4.3. 暮らしのサポート機能類型化の結果

多摩ニュータウンにおける暮らしのサポート機能は、①「帰属」、②「見守り」、③「現

状認識」、④「動機づけ」、⑤「移動」、⑥「教育」、⑦「対処」の７カテゴリーである。以下、それぞれのカテゴリーの解説と根拠となった事例をいくつか呈示する。

暮らしのサポート機能　類型

| | カテゴリー | 機能 |
|---|---|---|
| ① | 帰属 | 居場所提供 |
| | | 役割付与 |
| ② | 見守り | 空間的近接 |
| | | 注視 |
| ③ | 現状認識 | 傾聴 |
| | | 状況把握 |
| | | 情報提供・共有 |
| ④ | 動機づけ | アドバイス |
| | | 呼びかけ |
| | | プレゼンテーション |
| ⑤ | 移動 | 移動補助 |
| ⑥ | 教育 | 技能教育 |
| | | 知識教育 |
| | | 全般的教育 |
| ⑦ | 対処 | 作業補助 |
| | | 代行 |
| | | 資金提供・調達 |
| | | 管理 |

**①「帰属」サポート**

「帰属」サポートは、７つのカテゴリーの中でも基本的で重要なサポートである。また、サポート機能どうしの関係においても重要な役割を果たすのだが、これは後に述べる。機能としては「居場所提供」と「役割付与」が見出された。（巻末資料１）

**「居場所提供」**

「居場所提供」はその人が住んだり、仕事したり、学んだり、人間関係を構築する場を提供するサポートである。もちろん住宅などの居住環境を与えることや住み替えの援助も「居場所提供」であるが、もっと精神的な「人間の依るべきところ」といった意味でのサポートがある。

義母と同居を始めた頃、友達をつくってもらおうと思って、福祉センターに車で通った。今は巡回バスが

ある。友達がたくさんできた。寿大学などいろんなメニューがある。やはり、呼び寄せられてきたような同じ境遇の方と友達になるみたい。友達が広がってよかった。福祉センターの企画でバス旅行があり、よく行っていた。市民合唱団にも楽しそうに参加していた。

これは主婦が呼び寄せた義母を、福祉センターに連れて行ったエピソードであるが、福祉センターという地域の施設が、まだ街になれていない義母に、友人ができる場を与えているということになる。そして、そのサポートを手配したのは嫁である主婦である。

（一人暮らしというとたいへんでは？）そんなことないない。考え方による。のんびりしているから、苦痛にならない。ここがあるからかもしれないね。ここに来ればお昼つくってくれるじゃない。朝は家でパンかなんか食べて。昼はここで食べて、夕方までここでぶらぶらしている。一日つぶせるし。あと、老人会に入って、あちこちと遊びに行ったりしているんで。そんなに、寂しいと感じたことはない。

この事例は、高齢男性の一人暮らしに対するコメントである。福祉亭で昼食をとり、老人会で色々なイベントに参加することで、「苦痛にならない」「寂しさを感じていない」としている。それが本音かどうかは別としても、福祉亭や老人会という場が、彼に居場所を提供していることには変わりはない。

**「役割付与」**

「役割付与」は、被援助者に何かしらの役割を与えることで、社会とのつながりや、自分が必要であるという認識を与えるサポートである。

小児科医療事務のパートを、下の子が中一になってから始めた。8:30～13:00、週 3 回。社会参加というと大げさになるけど、充実感はあった。

この事例は主婦がパートを始めたときのコメントである。もちろん小児科にパートに出るというのは、雇用関係であり、労働力提供による収入を得るという交換関係である。しかし、この場合、金銭的な充実よりも、「労働者」、「小児科という事業体の一員」という役割を与えられることで、社会参加による充実感を得ている。これは小児科が、主婦に対して、役割を付与したからである。

いまは、ここの洗い場にボランティアで週３回来ています。夕方の方が少ないようなので。３時頃家を出て、ここに３時半に入って、一応７時までという約束で。私としては、やはり人と接していないとおかしくなっちゃうと思って。

この事例は高齢女性が、ボランティアをしているシーンについてのコメントである。ここでも自分がボランティアでサポートしているという側面より、洗い場のボランティアと

いう仕事（役割）を得ることで、「おかしくなっちゃう」という状況に回避できるという側面がクローズアップされている。

このように「居場所提供」は彼らに自分が依るべきところを与え、「役割付与」はその居場所の中で、より具体的に自分が役に立つという認識を与えるサポートである。このサポートは「帰属」という人間が生活していく場所を確保するという基本的条件を実現するための機能である。

### ②「見守り」サポート

「見守り」サポートは、「空間的近接」と「注視」の機能からなる。

#### 「空間的近接」

「空間的近接」は一見サポートととらえられないような機能である。これは他者のそばにいたり、同居したりという空間的に近くにいること自体がサポートになっているという機能である。

| |
|---|
| 母が急死だった。父はそのとき入院していたこともあって、真っ白になってしまっていたので、３～４ヶ月ぐらいうちにいた。大変だから、一緒に住もうと提案した。夫もよいといってくれたし。 |

この事例は、主婦の実母が急死したときに、父と短期間同居したときのコメントである。自身の入院と妻の急死という状況が重なり、「真っ白になってしまっていた」父をサポートするために、主婦はとにかく同居することで、父の生活の不安に対処した。具体的なサポートよりも、とにかく近くにいることが重要であると判断したからである。

| |
|---|
| このあいだ、長男に死なれた。37 歳で。それで息子が死んだから、いなかから東京に出てきた。孫の面倒を見るために。小学１年生と３年生。うちの息子の嫁が役所の職員なんで。 |

この事例は、高齢男性が長男の死によって上京してくるエピソードで、働いている息子の嫁の代わりに、孫の面倒をみるために、上京という「空間的近接」を行い、特定の不安やニーズに対処するというよりも、近接することで、柔軟に様々な対処ができるようなサポートを息子の家族に提供している。

#### 「注視」

「注視」は、「空間的近接」からさらに「見守り」の集中力を高めたものである。

| |
|---|
| 相模原は、車が多く、工場もあって子供にはあぶないと思った。大きな道もあった。その点は、ニュータウンと違っていた。公団だと歩車分離だし、学校が近くに配置されている。親がベランダから子供が遊ん |

でいるのを見渡せるのもよかった。

この事例は、主婦が住み替えをする際に、公団住宅と他のところを比較したときのシーンである。ニュータウンの団地では、親がベランダから子供が遊んでいるところを「注視」できること、つまり、そのような居住環境の構造が持つサポート機能の存在が、そこに住む判断基準になったのである。

お隣の方が、黒川、尾根幹線の向こう側で畑を借りてるらしい。そこでとったものをいただいたり、会えばお話ししたり。何かあったら、扉をどんどん叩きなさいよと言ってくださったり。

これは高齢女性が、隣人について語ったエピソードである。「何かあったら、扉をどんどん叩きなさい」という隣人の発言は、「私はあなたをいつも気にしていますよ。注視していますよ」という態度の表明である。このような関係（サポート）があることが、高齢女性の一人暮らしに安心を与えている。

このように「空間的近接」や「注視」は、直接的な「補助」や「代行」のサポートではない。「側にいること」や「あなたを気にしているよ」という態度は、被援助者にとって、他者の存在を常に感じ、いざという時のセーフティネットとなるというサポートである。

### ③「現状認識」サポート

「現状認識」サポートは、被援助者の取り巻く状況を正しく認識するためのサポートである。機能としては、「傾聴」、「状況把握」、「情報提供・共有」である。

#### 「傾聴」

現状把握には２つの側面がある。ひとつは援助者が、被援助者の状況を把握すること。もうひとつは、被援助者が自分自身の置かれている状況を認識することである。「傾聴」はそのうち援助者が被援助者の状況を正しく把握するために必須の行動である。

主人が倒れた時、本当に目の前のことが心配で。その時、市役所の人が心配しなくていいよと。ありがたかったですよ。自分の身内には相談できなかったので。

このエピソードは、高齢女性が、夫が倒れたときに市役所に相談に行ったときのものである。「目の前のことが心配」な彼女に、市役所の担当者がよく話を聞き、状況を把握した上で「心配しなくていいよ」という言葉をかけている。

ある時、おばあちゃんから電話があり、自分がサークルのなかでいじめられているということを記事にして欲しいということがあった。もちろん話を聞いてあげるだけ。

この事例は、地域情報誌を発行している女性がコメントしたシーンである。自分がいじめられていると訴える老婆に対し、彼女は話を聞いてあげることをした。もちろんそのような記事を書くことはない。

この２つ事例から考えられるのは、現状把握というサポートの前に、単純に話を聞いてあげることそのものがサポートであることが伺える。「傾聴」で何を把握することも重要だが、被援助者に対し、「私はあなたのことを真剣に考えているよ」「私はあなたの味方だよ」ということを理解してもらうことが現状把握の第一歩となるようだ。

**「状況把握」**

「傾聴」からスタートし、「状況把握」にいたる。

長女の後ろに座っていた子が、はさみで長女の髪を切ってしまったことがある。あとできくと、はさみがあって、ちょっと切ってみたかったというそれだけのこと。このときは、お母さんに直接おはなしした。

このエピソードは、主婦の子供に関するシーンである。子供が髪を切られるという「いじめ」を思わせる事件に、主婦はいじめと決めつけるわけでもなく、相手に怒鳴り込むわけでもなく、髪を切った子供の母親と直接話すことで、単なる悪戯であることを確認する。この冷静な状況把握がなければ、親の介入によって子供たちの関係に影響が出て、それこそ「いじめ」を誘発していたかもしれない。

間違って押してしまったことがあって、すぐどうしましたと連絡が入る。あれは心強いです。反応がないとタクシーが飛んできてくれるみたい。

これは、高齢女性が自分の住んでいる部屋についている、非常呼び出しボタンを誤って押してしまったときの事例である。非常ボタンによって、まず「どうしました」という連絡が入る。そして、反応がないとタクシーが駆けつける仕組みになっている。このシステム自体は、先の「見守り」機能といえるだろう。その後の対応やタクシーが駆けつけるというのは、「何かあったかもしれない」住宅に行き、状況を把握し、次の対処に移るためのサポートである。

**「情報提供・共有」**

援助者が被援助者に情報を提供したり、両者が情報を共有したりすることで、被援助者の現状認識をサポートする場合もある。

主人が若い時に軍需工場に働いていて、それ以来、厚生年金に加入していてくれたおかげで、若齢老齢年金で。その後、会社に 27 年いたものですから。それで、若齢老齢年金というのがあるよと、いまの市長さんが教えてくれたんです。それで、立川の社会保険事務所に足を運んで。

この高齢女性の事例では、夫が亡くなった時、市役所の担当者から、年金の情報を得ることで、自分がそれをもらえる「現状」にあることを認識し、家計に関する不安に対処できたということになる。

母の急死を体験して、予期しないことが起こるということを実感した。だから、自分はなるべく何があっても家族が困らないように、話をするようになった。

母の急死で、ほとんど家の中のこと（判子がどこにあるかなど小さなことも含めて）が情報共有されていなくて困った経験から、主婦はなるべく家族と情報を共有しようと努力している。これは自分が死んだときの不安に対する対処方法になる。

先生との交流も盛んで、同じ日に父母別々の飲み会をやったりする。１次会が母親で、２次会の前に、子供を受け取るみたいな。２次会は父親で、先生は両方に出席する。

この事例では、小学校の教員が、父母との情報共有をはかるため、わざわざ父母別々に飲み会を開催するということをしている。

### ④「動機づけ」サポート

「動機づけ」は、「現状認識」サポートからつながるカテゴリーで、その境界はお互い重なり合っている場合が多い。現状を把握し、その次の段階として、行動を促すためのサポートである。機能は「アドバイス」「呼びかけ」「プレゼンテーション」である。

**「アドバイス」**

上記の「情報提供・共有」に近いが、ただの情報提供ではなく、より行動を促すためのサポートである。

やはり男と女は違うから、下の子には、あなたの好きなことをしなさいと言った。好きなことしかものにならないタイプだから。

これは主婦が息子へのアドバイスであり、将来の行動への動機づけである。

「呼びかけ」

「呼びかけ」機能は、「アドバイス」のように、被援助者の行動だけを促すだけでなく、「自分もやるからやろう」という、協働への誘引である。

| |
|---|
| 自分の住んでいるマンションは5年前にできたところ。主人が何かしなくちゃと考え、管理人を通じて、呼びかけたところ、早期退職した人などが集まって、シニアの会を結成。とりあえず飲みながら何をしようか議論している。 |

| |
|---|
| 近所に仲いい人が一人いて、いつも話したり誘ってくれたりするんですけど。あと、年1回、病院に勤めていた時の仲間が食事に誘ってくれたりするんですけど。 |

「プレゼンテーション」

「プレゼンテーション」サポートは、被援助者が何かを表現し、アピールすることをサポートする機能である。この機能によって、被援助者の行動や考え、成果を表現してあげることでさらに、モチベーションをあげることができる。

| |
|---|
| 知名度があがると、色々は人からのアプローチが増えていく。こんなことをしているから、載せて欲しいといった要望。 |

| |
|---|
| 最近、多い要望は、「もしもししんぶん」に折込広告を挟んで欲しいというもの。デリバリースタッフは町名毎のエリアで分かれているので、ここの団地だけにという折込広告ができる。学習塾やケーキ屋、美容室のキャンペーンなど。 |

| |
|---|
| 今、自費出版のお手伝いをしている。もしもしネットは日に700のアクセスがある。地域の情報をネットでみるという時代がきた。今度は読者の体験広告をやってみようと思っている。 |

この三つの事例は、どれも多摩ニュータウンの地域情報誌「もしもししんぶん」に関するコメントである。地域情報誌は、読者にとっては、「情報提供・共有」サポートとなるが、記事や広告を載せてもらうことは、「プレゼンテーション」サポートとなる。つまり、地域情報誌は、地域住民の「動機づけ」をサポートする機能を持った事業なのである。

### ⑤「移動」サポート

「移動」というサポート機能は、「補助」や「代行」という機能に包括されるように見えるが、移送サービスのＮＰＯスタッフが以下のように述べている。

移動に目をつけたのは、いい目の付け所だと思う。アンケートしても出てこないのは、外出できなくなったらあきらめる。ここに依頼のある人は、外出しようと思っているわけで。ノリタク実験で感じたけど、まずあきらめてしまう。そうすると、「この町から出て行くか、外出しないか」という選択をするので。移動は、介護保険からもサービスとして取り入れられなかったし。いま支援費も介護保険と一緒にとなったら、また問題となるんですが。移動は、権利として一番遅れているんですね。

「移動は権利」という表現には、他のソーシャルスキルと比べて、移動が人間にとって、重要な意味を持つことを示唆している。なぜなら「ここに依頼のある人は、外出しようと思っているわけで」とあるように、先にみた「動機づけ」と密接に関係にしているからである。また、後に述べるように、多様な場を行き来するために、人が動くことができるということは大変な価値を持つ。したがって、ここでは独立したサポート機能としてカテゴライズしている。

**「移動補助」**

長女は中学受験をさせた。小五の時から進学塾。当時、町田の塾か、多摩センターの塾があったが、町田の塾に通わせた。夜なので、子どもが酔っぱらいにからまれたりしないように、車で送り迎えをした。

月１回の病院に行くときはタクシーで行くか、福祉亭でやっている生活サポート隊で車の送迎を使っている。会員になると１時間いくらという形で、車を運転できるひとがそのときいれば、病院まで連れて行ってもらえる。

上が子供の例、下が高齢女性の事例である。年齢や目的は違うが、どちらも「ここではないどこか」に安全に行き、目的を達成するために「移動」は重要な条件となっている。どこかに移動することが可能でなければ、せっかくのモチベーションは無駄になってしまうからである。また、子供の例のように、送り迎えは「移動補助」でありながら、「見守り」機能も持っているのがわかる。

### ⑥「教育」サポート

「教育」サポートは、「技能教育」、「知識教育」、そして２つを含む「全般的な教育」に分類できる。このサポートは一般的にいえば、幼少期は家族が、その後は、各種学校が担当するサポート機能である。

**「技能教育」**

膝下の水溜りで溺れて、子供を失うということは絶対に嫌だったので、小学校１年からスイミングスクールに通わせた。

これは主婦の「水溜りでおぼれて子供を失う」という不安に対処するためのスイミングスクールという主体が行う教育サポートの採用である。

**「知識教育」**

性教育、息子は父親に任せた。わからない。娘には、そういうことがきちんと書いてある本を買って机の上に置いておいた。あとで彼女が「お母さん、読んだよ」と。そう言う時、病気になってもらいたくない。

これも子供の性の問題に対する不安への対処である。「教育」サポートは、やはり子供に対して行われるものが多かった。

### ⑦「対処」サポート

「対処」は、いわゆる誰もがイメージできるサポートの形である。何かをしようとしている人のお手伝いをする「作業補助」機能、被援助者の行動を完全に代わって行う「代行」機能、経済的支援となる「資金提供・調達」機能、または、企画やマネジメントを手伝うことは「管理」サポートである。これらの機能は、多くの場合、市場サービスとして、存在し、また、社会福祉が長い間、「援助・支援」として認めてきたものである。ところが、不安への対処という視点からは、この「対処」は最後の最後に必要となるサポートである。

以下、それぞれの事例をあげる。

**「作業補助」**

２万部を配るのは大変なことだった。それはやってみて気づいた。家族にも手伝ってもらって、夜中に２時までかかったが発行日までに全部配ることができなかった。そこで次の日の新聞折込にした。

地域情報誌の発行した主婦の事例。家族が仕事をサポートしている。

**「代行」**

父は何もできないので、私がある程度のおかずなどをつくって、持って行く。料金の振込みなんかをできないので、私がやっている。

主婦が一人暮らしの父の代行しているエピソードである。

「資金提供・調達」

| |
|---|
| 世田谷区は、子供を育てるには良い場所。入園金として、12 万円の補助が出て、６歳の３月末まで、医療費はただ。だから、稲城に引っ越してきて、まずそういうことが気になった。 |

| |
|---|
| 家賃は、当時 10 万円ぐらい。社宅手当で５～６割でていたが、夫が単身赴任したら、こちらには出なくなった。夫にはでるが。 |

資金的なサポートは「対処」の中でも重要な機能である。援助者は、家族、地方公共団体、国、そして、所属する組織や団体など、帰属しているところから行われる。もちろん、保険や共済のように資金的サポートを受けるために帰属する集団やシステムをつくることもある。

「管理」

| |
|---|
| ２年前に防災などを意識して自治会ができた。役所に勤めている人が世話役をしているが、その後をやろうという人がいない。 |

これは、自治会の世話役という組織の「管理」サポートをする人材不足を指摘したコメントである。

以上のように、「対処」サポートは直接的な援助である。また、サポート内容が複雑であれば、専門化し、そのサポートを提供するために「教育」サポートが必要になる。

## 4.4. サポート機能間の関係

今まで分析してきたサポート機能はお互いにどのような関係にあるのか。ここでは、７つのサポートカテゴリーの関係を、インタビュー対象者で、76 歳の女性の事例で考察していく。

### 4.4.1. ある高齢女性の事例

この高齢女性は、現在、Ａ団地に一人暮らしをしている。目が不自由で、１ｍ前にいる人の顔が分からない状態だから障害者手帳を取得している。夫に早く先立たれ、息子と娘がいる。どちらもすでに家庭を持ち彼女とは別居している。ただし、Ａ団地には娘の家族が住んでおり、彼女はいわゆる「呼び寄せ老人」ということになる。まだ、ニュータウンに住んで 2 年程度である。

彼女は都市再生機構の高齢者向け優良賃貸住宅に住んでいる。ここにはいざというときの対処が可能な警報システムが有料で導入されている。この住宅に居を構えることができたのは、娘家族によって、近くに呼び寄せられたからであり、彼らや都市再生機構による「居場所提供」、つまり「帰属」サポートの結果である。これで彼女は自分が暮らしを営む場所を得ていることになる。また、娘さんが近くにいることは「空間的近接」や「注視」の「見守り」サポートも実現している。また、住居の警報システムも「見守り」機能を担っている。これらのことが彼女の不安を解消しているのは、以下のコメントからも読み取れる。

| |
|---|
| 娘がそばにいるのは心強い。自転車で２、３分のところにいるから。 |

| |
|---|
| すぐ答えてくれる。間違って押してしまったことがあって、すぐどうしましたと連絡が入る。あれは心強いです。反応がないとタクシーが飛んできてくれるみたい。 |

このようにみると、まず前提として、居住環境の確保、家族との絆のような広い意味での「帰属」（自分の依るべきところ）があり、しかもその中で「見守られている」という状況が安心を生む前提条件といえる。もし彼女が「帰属」や「見守り」を感じることなしに、目が治らないという厳しい現実をつきつけられていたらどうなっていただろうか。また、そのような状態で、誰かに地域のイベントに参加しましょうという「呼びかけ」られても、なかなか行動する「動機づけ」となることは難しいといえる。もちろん、そのような状態では「教育」を受けることや、実際の「対処」を受け入れることも難しくなるだろう。

ところが、彼女は、決して全面的にこの街や暮らしに「帰属」しているわけではない。

以下のコメントは、ニュータウンにきて間もなく、また、高齢者向けの喫茶・食事スペースを運営している福祉亭という場所にもまだ「帰属」が感じられない彼女の複雑な気持ちが現れている。

| |
|---|
| 長年住んでいたから、西多摩のほうがよかったなあと思う。まだここに本当に慣れない。慣れればよくなると思うけど。 |

| |
|---|
| ここ（福祉亭）に来て楽しいというより、利用させてもらっている感じ。誰とでも（うまくやる）というわけにはいかないから。 |

ただ、彼女は目が不自由でも、次のようなことにチャレンジし、別の「帰属」をつくっている。

何にもやってないとストレスがたまるので、福祉センターで友達と民謡をやっている。そのときが一番楽しい。

このように、彼女は家族、福祉亭、友人関係といういくつかの「帰属」を得て、その関係を「移動」することで、目の障害という不安と闘っているといえるだろう。ここでポイントになるのは、それぞれの場で完全に帰属を感じ、適応することは不可能であり、必要もないということである。

彼女は、福祉亭に完全に「帰属」していないが、提供される移送サービスを利用することで、「移動」サポートを得て、病院に通うことはできる。また、福祉亭のサービスが使用できない場合は、タクシーを使用して何とか自分で通院できる。

月 1 回の病院に行くときはタクシーで行くか、福祉亭でやっている生活サポート隊で車の送迎を使っている。会員になると 1 時間いくらという形で、車を運転できるひとがそのときいれば、病院まで連れて行ってもらえる。

つまり、病院に行くというモチベーションを保ち、自分で様々なサポートサービスを選んで行動している。このような自分に対する「動機づけ」は、彼女が介護の仕事を 70 歳まで続けているというところも影響している。今まで、援助者としてやってきた技術や知識が彼女を助けている。その能力によって「現状認識」が正しく行われ、不安に対処している。それは次のようなコメントによく現れている。

昔の友たちに電話をかけたとき、長寿会のメンバーもお風呂で亡くなったということを聞いた。そういう話はよく聞く。それもみんな一人暮らしの人ばかり亡くなっている。自分もいずれなんて考える。そんなときは脈を計って、今日は正常だなと確認したりする。自分でそういう管理できるのは（介護の仕事で）勉強しておいてよかった。

### 4.4.2. サポートのプロセスモデル

以上のような事例分析でみえてくるのは、理想としてのサポートのプロセスモデルである。「理想としての」としたのは、決してモデルどおりの順序でサポートは提供されないし、その順序でなくともサポートは成り立つからである。また、プロセスではなく、各サポート単体でも機能することも確かである。ただし、ここでは理想のモデルを示すことで、サポート機能間の関係性を明確にしたい。

まず「帰属」があり、その上で「見守り」がある。これが基盤である。これは上記の事例でみたとおりであるが、他の事例でも指摘がある。

見守っているというの重要。でも、見守りが機能するのは、人間関係があることが重要。

サポートは一方通行では成り立たない。

お互いの顔がわかっていると、「やってあげたい」を出しやすい。

このコメントは、どれもコーポラティブ住宅の入居者のものである。コーポラティブ住宅は、何世帯が集まって、共同で土地を購入し、自分たちで設計者や施工者を雇い、好みの家を建てるというものである。つくりあげるプロセスを共有し、「顔の見える」コミュニティを形成している入居者だからこそいえるコメントである。

お互いの顔がわかっており、各々がそのコミュニティに「帰属」を感じ、さらに「見守り」がなされていれば、それ以外のサポートを受けいれやすくなり、自分からサポートをすることも容易になる。つまり、「帰属」「見守り」サポートは、サポートそのものを成り立たせるために必要なサポートという表現が妥当である。だからこそ基盤なのである。

その上で、「現状認識」→「動機づけ」→「移動」→「対処」というプロセスが理想である。

会員になりたいという時は、まず本人の家におうかがいする。生活環境とか、ヘルパーがどんな人かとか、どの病院に通っているか、どんな状況なのか確認する。そして、移送するときのコーディネーション、プランをもつ。その上で、電話してきてくれるから、こちらも安心できるわけです。われわれもケアする人の情報をもらわないと、安心して相手の信頼をもらえないから。

このコメントは、移送サービスのＮＰＯスタッフのものである。ここでわかるのは、「移動」サポートを提供するＮＰＯでも、まず利用者の生活環境などの「現状把握」を行っているということである。これは以下のような例があるからだそうだ。

みなさん「たいしたことない」と言います。でも、行ってみると、段差がダーとあったり。お子さんの障害も「大丈夫です」と、行ってみたらすごく大変だったり。一人ひとりみんな違う。

サポートを実現させるためには、現状を把握し、サポートを提供する、または受ける上での問題をつぶしておく必要がある。また、以下のような問題もある。

アンケートしても出てこないのは、外出できなくなったらあきらめる人。ここに依頼のある人は、外出しようと思っているわけで。ノリタク実験で感じたけど、まずあきらめてしまう。そうすると、「この町から出て行くか、外出しないか」という選択をするので。

つまり、「移動」サポートを利用する人は基本的に「移動したい」というニーズを持って

いる人である。ところが、「外出できなくなったらあきらめる人」は、「移動」の必要があっても、そのモチベーションを持っていないことになる。

本当に必要な人に「移動」サポートをするとなると、「引きこもっている人」に「動機づけ」して、「移動」に対する需要を喚起しなくてはならない。そして、「動機づけ」の前に「現状把握」がなければ、何をどう「動機づけ」すべきかもわからない。

そして、移動先は、以下の事例のように塾や病院など、「教育」や「対処」のサポートを受ける場所であるので、「移動」から「教育」や「対処」へのプロセスがつながる。

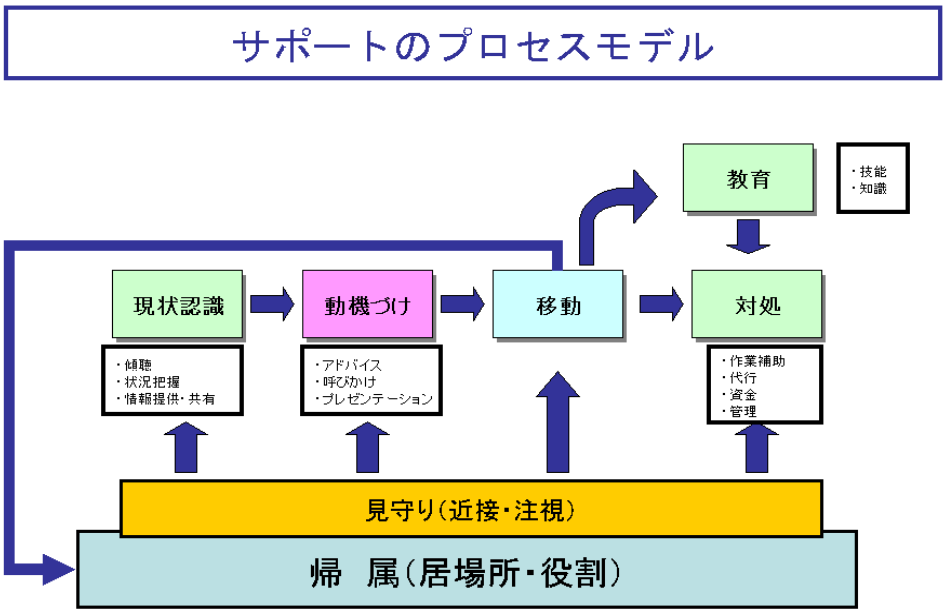
| |
|---|
| 長女は中学受験をさせた。小五の時から進学塾。当時、町田の塾か、多摩センターの塾があったが、町田の塾に通わせた。夜なので、子どもが酔っぱらいにからまれたりしないように、車で送り迎えをした。 |

| |
|---|
| 月１回の病院に行くときはタクシーで行くか、福祉亭でやっている生活サポート隊で車の送迎を使っている。会員になると１時間いくらという形で、車を運転できるひとがそのときいれば、病院まで連れて行ってもらえる。 |

また、「帰属」している場所への移動も「移動」サポートの重要な機能であるので、「移動」から「帰属」への循環が出来上がる。

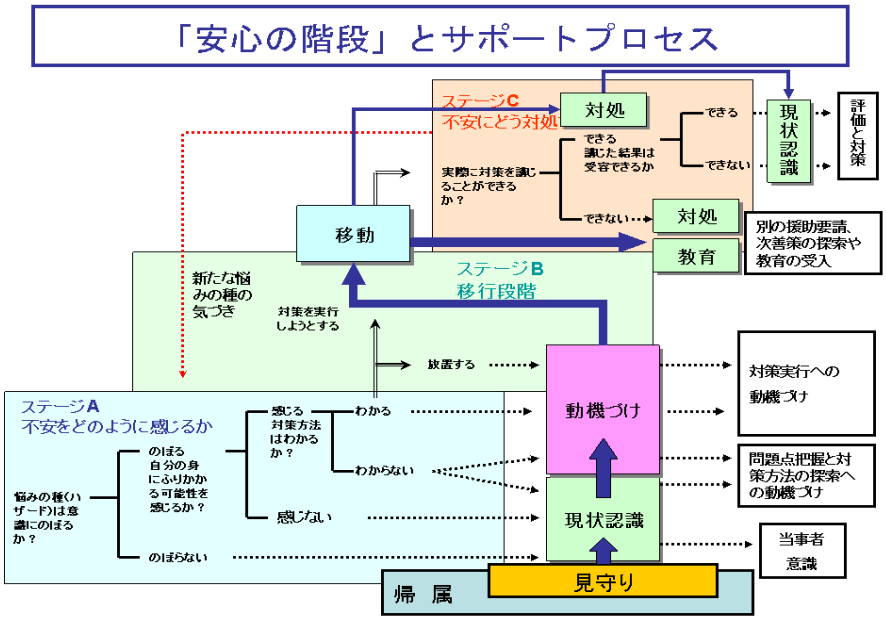
「教育」はその教育を受けることで、自分で「対処」ができることを目標に行われるので、「教育」から「対処」へのつながりがつく。

以上のようなプロセスを図示したものが「サポートのプロセスモデル」になる。




## 4.5.「安心の階段」とサポートプロセス

サポートのプロセスモデルは、前章でみてきた不安と安心が生まれるプロセスの「安心の階段」を登るために必要なサポート機能の連関でもある。



### 4.5.1. ステージＡでのサポート

まず、ステージＡの「不安をどう感じるか」という段階であるが、ここで階段を昇らず、途中で脱落してしまうのは、「悩みの種が意識にのぼらない」「自分にふりかかる可能性を感じない」「対策がわからない」そして、「対策がわかったが、一旦放置」というパターンである。

まず、悩みが意識されなかったり、他人事と感じたりしている場合、ここで求められるサポートは、現状を把握し、乱暴にいえば、対象者を不安にして警鐘を鳴らすことである。この「現状把握」サポートで、当事者意識を持たせることによって、対策方法を模索する段階に登ることができる。

次に悩みを持ったとしても、漠然とした不安である場合は、その原因をつきとめ、具体的な問題点に落とし込むことが必要である。また、対策方法がわからない場合は、方法に関する情報を提供することで、次の段階に進むことができる。ここでも必要なサポート機能は「現状認識」である。また、対策方法がわかっても放置される場合があるので、「動機づけ」サポートで、対策実行へ導いてあげる必要がある。

ここで注意しなくてはならないのは、悪戯に不安を煽ってはいけないことである。前にも述べたように、サポートが有効に働くためには、その前提として、「帰属」と「見守り」が機能していなければならない。その基盤があってこそ、安心して、「現状」を受け入れることができるのである。

### 4.5.2. ステージＢでのサポート

ステージＢでは、どうであろう。ここは不安の対処に向かう移行段階である。不安への対処方法がわかっても、行動に移さなければ何の意味もない。ここで重要なのは、「動機づけ」、そして「移動」サポートである。実行に移すことを促すことはもちろんのこと、その対処方法を手に入れたり、対処のサポートを受けたりするために、移動しなくてならなくなるということは多い。だからこそ、「対処」と「動機づけ」をつなぐ「移動」という要素は重要である。また、「帰属」や「見守り」が得られる多様な場を確保するためには、そこをさがし、行き来する「移動」が必要という側面もある。

### 4.5.3. ステージＣでのサポート

最後に、ステージＣの「不安にどう対処するか」という段階である。ここでの不安は、対処を実際に講じることができないときの具体的な不安とあきらめ、そして、講じた結果を受容したときの不満とあきらめである。

具体的な対処の方法がわかったが、実行できない場合、別の「対処」のサポートが必要になってくる。次善策を探り、新たな援助要請をするのである。また、対処を自分で行うために、様々な「教育」サポートを受ける場合もあるだろう。

一方、実際に「対処」サポートを受けても、その「対処」の結果を受け入れるかどうかは別の問題である。対処の結果を受け入れて満足してこそ不安の解消となる。結果を受容できない場合、その状況を「現状認識」し、評価することで次の対策に移ることになる。そして、改めて、「安心の階段」を昇ることになる。

以上が、「安心の階段」とサポートプロセスの連関のモデルである。様々なサポートを利用しながら、上手に「安心の階段」を登ることができれば、暮らしの不安を解消することができる。そのとき、サポートプロセスのモデルのように「理想的な」プロセスを「階段」とともにたどることができれば、よりサポートの効果を高めることができる。

次章では、「安心の階段」を登るために、地域にある生活資源をどう利用すればよいのか、また、生活資源とサポート機能の関係はどうなっているのかを考察していく。

# 第５章　不安を解消するための生活資源とサポートの関係

## 5.1. ソフト資源とハード資源

第１章でみたように、不安を解消するために生活資源を充当すること（「暮らしの安心マネジメント」）は、自助以外はすべて、様々な主体によるサポートを受容することと同意である。生活資源はソフト資源とハード資源に分かれる。

| |
|---|
| 母が死んだときは、父は入院していたし、私も混乱していたけれど、葬儀屋に頼めば、まるでベルトコンベアに乗ったような感じで、葬儀、お坊さんの手配など１年間が流れていく。 |

これは、ある主婦の母親が亡くなったときのエピソードだが、この場合、葬儀屋のサービスは葬儀時の不安を解消するためのソフト資源である。この生活資源は、市場領域のビジネスサービスとして提供されるサポートでもある。

| |
|---|
| 性教育、息子は父親に任せた。わからない。娘には、そういうことがきちんと書いてある本を買って机の上に置いておいた。あとで彼女が「お母さん、読んだよ」と。そう言うときになった時、病気になってもらいたくない。 |

この事例は、私領域の家族による子供への性教育というサポートであり、このとき、親は子供の性の不安に対処するためのソフト資源ということになる。

それではハード資源とは何か。

| |
|---|
| 相模原は、車が多く、工場もあって子供にはあぶないと思った。大きな道もあった。その点は、ニュータウンと違っていた。公団だと歩車分離だし、学校が近くに配置されている。親がベランダから子供が遊んでいるのを見渡せるのもよかった。 |

この事例は、ある主婦がニュータウンへ住み替えしたことに関するコメントである。ニュータウンの歩車分離という構造、団地の中庭が見渡せる構造そのものが、子供の安全に対する不安を解消する資源となっている。この街の構造には、「見守り」というサポート機能が埋め込まれているということもいえる。言い換えれば、ニュータウンの構造は、行政（建設当時）のハード資源によるサポートを内在させているということになる。

次の場合はどうであろうか。

義母と同居を始めた頃、友達をつくってもらおうと思って、福祉センターに車で通った。今は巡回バスがある。友達がたくさんできた。寿大学などいろんなメニューがある。やはり、呼び寄せられてきたような同じ境遇の方と友達になるみたい。友達が広がってよかった。福祉センターの企画でバス旅行があり、よく行っていた。市民合唱団にも楽しそうに参加していた。

何度も引用している事例だが、この場合、舞台は福祉センターという行政のハード資源である。ただし、そこで実施されている「寿大学」や「バス旅行」、「市民合唱団」は、福祉センターを媒介としたソフト資源である。サポート機能としては、「帰属」サポートの「居場所提供」であることは前に述べた。

つまり、このようにハード資源も、ソフト資源によって、サービス化することでより有効な不安解消のサポートとして機能するし、そもそもこの二つの組み合わさないと、不安解消の生活資源として成り立たないものが多い。

ここはそういう意味では暮らしやすい。独り身だけど、ここ（福祉亭）に来たらいいし。昼 450 円でつくれといわれても、なかなか。友達できるし。碁や将棋をやったり。こういうのを他の所でもつくればいいんだけどね。ここが無くなったら、ちょっと昼間どこへ行ったらいいか困るね。こういうのがあちこちあればいいんだけど。

このコメントから読み取れるのは、福祉亭というハード資源（実際の喫茶店の場所）とソフト資源（昼食の提供や生活サポート）が組み合わさって、A団地の「帰属」を生み出すサポートを提供しているということである。ちなみに、福祉亭の場合、ハード資源が存在するものの、共領域のコミュニティサービスとしてのソフト資源と位置づけるほうが妥当であろう。

## 5.2. 埋め込まれるサポート機能

### 5.2.1. サポートの多義性

上でみたように、不安解消のためのソフト資源にも、ハード資源にも何かしらのサポート機能が存在していることになる。逆にいえば、生活資源にサポート機能を埋め込むことで、不安解消の資源に変換することができるということである。その場合に、注意するべきことは、サポート機能が持つ多義性である。

タクシーと移送サービスの違いは何か。わたしたちは、地域なんです。地域のサークルとしてやっているけど、タクシーは違う。参加する人もそこを意識しないと、ただ運転すればいいとなってしまう。ちょっと違うと互いになってきている。そこで事業を始めなくては、始めるなら利益を出さねばと当てはめるからだめになる。

このコメントは、移送サービスＮＰＯのスタッフが、タクシーとの違いを説明したものである。同じ「移動」サポートを提供していても、「地域」を意識し、コミュニティサービスとして提供する自分たちとビジネスサービスとしてのタクシーでは、サポートの性格、効果が違うということを主張している。

また、こういったこともある。

一人住まいでも、家の中に閉じこもるとだめやね。そういう人が多い。そういう人をどうやって連れ出すかが問題で。うちの同じ棟の人でも、お昼に弁当を配ったらどうかという人もいる。私はそれ反対しとる。弁当配るということは閉じこもる人をますます増やす。もってけば外に出る必要ないからますます動かん。それよりも、外に引き出す方法を考えた方がいいんじゃないのと言っているんだけど。その人も。年寄りのことをいろいろ考えて活動してくれているので。ここまで足を運んで食べに来るんでもいいんだけど。

このコメントは、給食サービスに対する高齢男性の評価であるが、弁当配布という「対処」サポートのうちの「代行」サービスが、一方で、引きこもりをつくってしまう可能性を示唆している。

子供はずっと見守られていると窮屈になって、ストレスを感じる。監視されているのはつらい。本当は意識せずに見守ることができればよい。

これは子供の安全を考えて、送り迎えを祖母に頼んでいたら、子供が学校でも、家庭でも、帰り道でさえ、誰かに「監視されている」ということにがまんができなくて、不満を訴えた事例である。

このように、サポートが予想もしない効果を生み出すこともある。特にマイナスに働くことがあることに注意しなくてはならない。

小児科医療事務のパートを、下の子が中一になってから始めた。8:30～13:00、週 3 回。社会参加というと大げさになるけど、充実感はあった。

そんなときに地域の広報の仕事があることを知った。大学在学時に、いわゆるマスメディアではなく、身近な情報を発信するメディアがあればと思っていたので、この仕事はその当時のイメージに近いと思い参

加することにした。職場と家との往復のなかで、考えや人間関係がせまくなってしまうのが嫌だった。だからそれ以外の仕事をしたかった。夫も単身赴任でいなかったし、子供のことだけになってしまうのは、子供にとってもかわいそうだと思った。

この２つの事例は、どちらも主婦のコメントである。小児科にパートに出ること、または今の職場以外に広報の仕事が、社会参加という充実感を生み出しているということになる。もちろん、雇用されて働く以上、給料が支払われるわけで、職場から主婦たちへのサポートは、「対処」サポートの「資金提供・調達」ということが主となるが、同時に、社会参加という「帰属」サポートの「役割付与」であるともいえる。

このような事例から浮かび上がってくるのは、サポートの多義性である。同じサービスでも、供給主体や提供者の意識などで、その性格や意味合いが変わることがある。しかも、不安を解消するサポートが、別の不安の種をまくことになるかもしれないという危うささえある。また、ひとつのサービスに、いくつかのサポート機能が埋め込まれる可能性がある。これがサポートの多義性である。

### 5.2.2. サポートを阻む自立意識

次にサポートの受け手の問題を考える。3 章でもまとめたとおり、多摩ニュータウンの住民は、自立という社会規範を重視している。このような姿勢が、ときには必要なサポートを阻む要因になることがある。

子どもの世話になりたくないというわけではないが、選択はしたくない。

娘夫婦が地方に行く時、一緒に来てもいいと言われたんですけど、私がいやだと言ったんですよ。娘に、やった子どもに迷惑はかけたくなかったし。馴れない所に行くよりは、勤めていてそんなに近所に友達もいないですけどずっと住んでいればあれするだろうと思って。

ひとりでいい点は、片付けていても、散らかっても、自分だけの世界だから、いいかげんなもの。

甘えるときは、甘えなさいと言われるけど、長年ひとりで暮らしてきたから、なかなか人に頼めない。

（いなかはなつかしくなりませんか）こういうことは割り切らんとな。両親も亡くなっているし。兄貴も亡くなっているし。娘も嫁に出しているから、そういう所へわね。一番気楽でいいじゃない。

どれも同居や老親介護にかかわるコメントであるが、「世話になりたくない」「迷惑をかけたくない」という意識が強く、サポートを受け入れようとしない姿勢が強い。

多数のコメントの中で「自立」という言葉が用いられるのはなぜだろうか。

基本的には父母が自立して生活をすることが基本で、私はそれをサポートするという姿勢。

入居８年目の主婦のグループで、毎年かならず１回旅行に行くグループを取材した。彼女たちは、同じ棟の同じ階段をつかう近所。だから同じ間取り。彼女たちの話はいつも階段で行う。決して家に上がりこむことはない。彼女らのほとんどが仕事を持って自立している。その中で、ベタベタしすぎない関係を保っている。でも、旅行に行けば、朝まで語り合う仲間なのだ。

これらの自立は、「経済的自立」「プライバシーの確保」「人に頼らないこと」などがないまぜになっていることがうかがわれる。

醤油を借りあう仲ではない。

雪かきのとき、シャベルを、玄関のところにおいておくから、使ってくださいとメーリングリストで流す。そうすると、勝手にとって、使って戻しておく。お礼などしない。

このコメントはコーポラティブ住宅の入居者のものである。入居世帯のメーリングリストをつくり、日常的な情報交換はそこですましている様子である。助け合いで生じる「借り」と「貸し」関係を解消するために、うまく電子的なコミュニケーションを介在させている。そして、助け合いはするが、「醤油を借りあう」昔の長屋の関係ではないことを強調している。

健常者がここまでやっているというサービス。でも自立させないといけないからサービス過剰はだめ。それと障害者や認知症の方に子どものような言葉がけをすることは許されない。ところが、健常者はそれをわからないからやっちゃう。そのずれはけっこうある。ケアとサービスのずれ。

これは移送ＮＰＯのスタッフが、ケアとサービスの違いを、自立をさせようとする姿勢の違いで説明している。ここでの自立の意味は「障害者や認知症の方に子供のような言葉がけをすることは許されない」という発言にみえるように、そのような人たちをラベルで呼ぶのではなく、かけがえのないひとりの人間（＝自立している人間）として接することに見出すことができる。

もうひとつの事例をあげよう。

| |
|---|
| でも、父はやはり自由にやりたいということで実家に帰っていった。孫も最初はよかったが、最後は少しうるさがれていたから、そういうこともあるかもしれない。 |

これはある主婦の、実父と自分の家族の短い同居が終わったことに関するコメントである。ここでは父親の「自由にやりたい」という気持ちと、同居に伴う煩わしさをできれば回避したいとする気持ちもみえる。

### 5.2.3. サポートの埋め込みと「安心づくり産業」の可能性

今までの事例から伺える多摩ニュータウンの自立とは何か。２つの側面がある。

ひとつは、「自分の力でなんとかする」「他人に迷惑をかけたくない」という意識である。この意識の裏には、サポート関係になることで、「貸し借り」という非対称の人間関係に陥ることを嫌うということである。「貸し」は返礼しなくてはならないという義務意識を生み出し、それがストレスになる。

もうひとつは、「自分の世界を侵されなくないから、他者のそれも侵さない」という過度のプライバシー重視という面である。プライバシーを強調し、相手との距離をとることで、自分の自由を守ろうとするところがみえる。

このような傾向の中で、多摩ニュータウンにおけるサポートはどのようなものであるべきだろうか。

ひとつの解決策として、サポートをサポートと思わせず、うまく生活資源に埋め込むことがあげられる。つまり、何気ない地域にある生活資源に、サポート機能を付加して提供するという方法である。こうすれば、自立したいと思う人たちに、ある程度なら、非対称の関係を感じさせずに、サポートを受けてもらうことが可能になる。

それに特に地域にある様々なサービス（ソフト資源）に付加することで、事業としても新たな魅力をつくりあげる。この方向性は、「安心づくり産業」の３つの形を示している。

（１） 既存の生活資源の中にサポート機能を見出し、不安解消の生活資源として読み替えて「安心づくり産業」とする。

（２） 不安解消の生活資源に、他のサポート機能を追加したり、不安解消の生活資源どうしを組み合わせたりすることで「安心づくり産業」とする。

（３） 必要なサポート機能から考えて、まったく新しいサービスをつくり、「安心づくり産業」とする。

## 5.3. 不安解消資源としての読み替えと機能追加

既存の生活資源が、不安解消のための生活資源にどの程度なるのか。以下、いくつかの事

例をあげる。

### ①地域情報誌「もしもششんぶん」

**生活資源分類**

ソフト資源（生活情報サービス事業）

**供給主体**

市場領域のビジネスサービス（または共領域のコミュニティサービス）

*※運営主体の多摩ネットワークセンターは、有限会社であるが、その出自や理念は、より共領域のコミュニティサービスに近いところにあるといえる。*

**サービス内容**

- 多摩ニュータウン、八王子市みなみ野シティを中心とした地域情報誌「週刊もしもششんぶん」の発行。
- 便利情報を集めた「ニュータウンカタログ」の発行。
- 地域情報サイト「もしもششねっと」の運営。

**埋め込まれたサポート機能**

「もしもششんぶん」は設立者の長谷川氏が、「もっと顔のみえる地域の関係をつくりたい」という想いでスタートした事業である。その長谷川氏が、創刊 20 周年を迎えた同誌が、なぜ成功したのかという質問に対して、こう答えている。

> もしもششんぶんの成功の要因は、多摩ニュータウンという生活圏の情報を提供しつづけたから。市の広報紙などは、市のことだけを書いているが、八王子の松が谷は多摩市への編入運動があったくらい、生活としては多摩市とのつながりが強い。そのような住民のニーズにあわせた情報を提供したことがここまでできた理由ではないか。

このようなコメントが示すように、「もしもششんぶん」の第一のサポート機能は「情報提供・共有」である。つまり「現状認識」サポートをしていることになる。

> 月 1000 円出商店などのホームページをつくってあげている。Ｗｅｂを利用することで、ニュータウン以外の顧客を呼び寄せることができる。正確なことはわからないが、そういう鮨屋があった。

もしもししんぶんは広告ばかりという人もいるが、地域の商店の顔のみえる広告こそが、地域の情報であり、それが活性化につながると考えている。

また、上記の事例では、「プレゼンテーション」サポート機能である。そして、２つ目のコメントは「プレゼンテーション」サポートが、「動機づけ」（ここでは地域の活性化へのつながり）のカテゴリーに入ることを示唆している。

１９９１年ごろから９３年ぐらいまで、主婦のための再就職準備講座を開いた。大和証券や千代田生命の協力。そこで働いている主婦に現場を語ってもらった。

長谷川氏は、当初から働く女性を応援したいという気持ちを持っていた。したがって、上記のような講座を開き、主婦の社会参加を促してきた。これは「呼びかけ」機能や「教育」サポートを担っているということになる。

さらに、「もしもししんぶん」は主婦たちに、働く場所を提供してきた。短時間で、自分の住んでいる場所に新聞をポスティングする仕事は、子供を育てながら、家事をする女性にぴったりのものである。

現在、デリバリースタッフは 85 名。みんな細く長くやってもらっている。子育てなどで一時期離れても戻ってくる。パートでも長くやればキャリアになる。

もちろん、お金の問題もあるとは思うが、仕事にいきがいを感じているのだと思う。

昨年 1 月に編集長を代わった。彼女も 3 人の子供を生み、育てながら仕事を続けている。

これらのコメントからみえるのは、「役割付与」機能の「帰属」サポートである。

このように、「もしもししんぶん」という地域情報誌という事業の中には、「現状認識」（情報提供・共有機能）を中心に、「動機づけ」サポート、「教育」サポート、そして「帰属」サポートという不安解消のためのサポート機能が埋め込まれているということになる。したがって、「もしもししんぶん」は、そのテーマ「ホットな心を伝えます！」という体現し、十分に「安心づくり産業」の資格を持っていることになる。

### ②ＮＰＯ「ハンディキャブゆづり葉」

**生活資源分類**

ソフト資源（移動サービス）＋ハード資源（車両）

**供給主体**

共領域のコミュニティサービス（特定非営利活動法人）

**サービス内容**

- 車による移動サービス
- 徒歩による移動サービス
- 階段昇降機による移動サービス

**埋め込まれたサポート内容**

「ゆづり葉」はまさしく「移動」サポートのための生活資源であるが、このサービスには「コーディネイト」というステップがあって、これが「現状把握」サポートになっているのは、先にみたとおりである。

> 会員になりたいという時は、まず本人の家におうかがいする。生活環境とか、ヘルパーがどんな人かとか、どの病院に通っているか、どんな状況なのか確認する。そして、移送するときのコーディネーション、プランをもつ。その上で、電話してきてくれるから、こちらも安心できるわけです。われわれもケアする人の情報をもらわないと、安心して相手の信頼をもらえないから。

また、後に述べるように、多摩市において、「移動」サポートを行う主体は少ない。これはバス網が発達していないとか、道路が悪いという意味ではない。「移動」サポートを担う主体の多様性がないということである。スタッフは嘆く。

> 社協は市の委託を請けて、同じような移送サービスをやっていたのを、2年前からは全部うちに来ている。社協は一切やっていない。社協がやっていてくれて、いっしょに考えていてくれたほうがまちとしては良かったのでは。いま、うちしかないというのが失敗かな。利用してくれる方も選択肢がないし。

このように、現在、コミュニティサービスという点では、彼らの孤軍奮闘に近い状態である。しかも、この移送という分野は、規制が多く、彼らがやりたいサービスがなかなかできない現状がある。

> 移送のしくみで言えば、第二種免許を持っている人しかそういうことをやってはいけないとか。いま困っている人を救ってあげたいのに、規制の網でできない。

地域の移動をサポートする生活資源を有効に働かせるためには、法的バックアップが必要になってくる。

### ③タクシー

**生活資源分類**

ソフト資源（移動サービス）＋ハード資源（車両）

**供給主体**

市場領域のビジネスサービス（株式会社）

*※今回の事例は、京王自動車株式会社*

**サービス内容**

- ハイヤー･タクシー
- 特定バス・貸し切りバス
- 多摩地区全域にタクシーによる民間救急（サポート cab）など

**埋め込まれたサポート機能**

タクシー会社は「ゆづり葉」とは同じ「移動」サポート機能を持つ。京王タクシーは、「ゆづり葉」とともに、多摩市の「乗り合いタクシー」実験に参加するなど、地域貢献に積極的であるが、そこには、企業としての地域貢献や社会的責任だけでなく、今後の高齢化社会を見据えた、ビジネスの側面からの動機もあったという。

ビジネスサービスである以上、採算性を重視することは、至極当然である。企業としての持続可能性を失ってしまったら、公共の交通機関として、社会に多大な損害を与えることになる。多摩市の「のりタク」実験では、ＤＲＴ（デマンド・レスポンシブル・トランスポート）という定時定路線型運行の乗り合いサービスと、一般のタクシーによるサービスの中間に位置するシステムを実験している。これは予約制、相乗りなどが特徴である。実験自体は、地域の新しい交通システムとして多くの成果を残したが、京王タクシー単体の採算性をみたときに、ビジネスとしては成り立たない結果となった。もちろんＤＲＴそのものを否定するわけではないが、京王タクシーが単体で、しかも多大な投資なしに「安心づくり産業」を目指すのであれば、新しい交通システムを生み出すだけではなく、既存のサービスに「移動」以外のサポート機能を埋めこむという解決策を考えることができる。

例えば、今でも、高齢者を病院などに送った場合、重い荷物を持っていれば、ドライバーが運搬をお手伝いすることを無料でやっているそうだ。それは、「ちょっとそこまでなら」という会社とドライバーのサービス精神であろうが、これをきちんとしたサービスとして付加するという形も考えられる。これは「対処」サポートの付加である。

また、既存の仕組みと組み合わせるという方法もある。

東京消防庁の試み「サポートｃａｂ」は、タクシーと東京民間救急コールセンターを組み合わせることで、新しいサポート機能を得て、不安解消の生活資源になっている。これは「救急車を呼ぶほどではないので、自分で病院に行きたい」とか、「どこの医療機関にいくべきか紹介して欲しい」という要求にこたえるもので、コールセンターが診察可能な最寄りの病院紹介、タクシーがそこへの移送を担当する。つまり、タクシー会社の支店からは、もともとの「移動」サポートに、「状況把握」から「情報提供」への「現状認識」サポートを加えることになる。そして、タクシーの運転手が、救命技能の認定を受けているこ

とから、「現状認識」のレベルをあげ、確実な「見守り」ができるようにしている。

このように、既存の仕組みを組み合わせることで、「暮らしの安心マネジメント」は可能なのである。

## ④コンビニエンスストア

**生活資源分類**

ハード資源（店舗）＋ソフト資源（小売業）

**供給主体**

市場領域のビジネスサービス（株式会社）

**サービス内容**

・　日用品や弁当・おにぎりを中心とした年中無休で長時間営業の小規模店舗

**埋め込まれたサポート機能**

社団法人日本フランチャイズチェーン協会ＣＶＳ部会が、コンビニエンスストア（以下、ＣＶＳ）の「安心づくり産業」としての可能性を示す取り組みを行った。それが「セーフティステーション活動」である。これはＣＶＳの街における安全・安心な生活拠点づくり活動を全国展開する試みである。各チェーンのＣＶＳが、同じポスターを張り、防犯・防災、安全対策（駆け込みへの対応など）、青少年の健全育成（酒類。たばこの販売禁止など）を意識しながら、営業するというもので、アルバイトへの教育や、各地域の交番との連携という形で、2003 年のトライアルより続いている。この「セーフティステーション活動」は、ＣＶＳを不安解消のための生活資源へ読み替えをする作業である。

この活動の中で、報告された事例をみると、ＣＶＳの「安心づくり産業」としてのサポート機能がみえてくる。

| |
|---|
| 同店の近くを仕事で回っていましたが、熱中症で気分が悪くなり、同店で飲み物を購入し、お店の外でしばらく休んでいましたが良くならず、店内に入って女性店員さんに話したところ、親切に対応してくださり、店内のカウンター近くで、少しの間休ませていただきました。快く対応してくださり、本当に嬉しかったです。ありがとうございました。(お礼の電話) |

| |
|---|
| ８月６日１６時３０分、男子高校生が自店の事務所に飛び込んでくる。話を聞くと自店横の道を部活が終わり帰宅中突然、原動機付自転車に乗った２０歳前後の男にお金を脅迫される。拒否したところ包丁を出し更に脅迫。被害者の高校生は逃げ自店に駆け込んできたとの事です。同店の店長がすぐに警察署に通報。 |

１６時４０分に警官４名到着、事情を説明したところ近隣にまだいるかもしれないということで被害男性をつれ捜索。１７時００分違う店に加害者がいたところ確保した。

６月２５日深夜、娘が大変お世話になりました。バイトの帰り道、深夜のため一人で歩いている途中、痴漢に会い近くのＣＶＳに駆け込み、警察に通報していただき、助けていただきました。お蔭様で大事に至らなくホットしております。ＣＶＳがなかったら、どうなってたかわかりませんでした。この時ばかりではなく、鍵を忘れて家に入れなかったときも、電話を貸してくださったそうです。買い物以外にも快く対応してくださる店員さんに感謝しております。本当にありがとうございました。（お礼のメール）

このような多くの事例は、ＣＶＳが犯罪や突然の病気など緊急事態に対応する「対処」サポートを行っていることを示している。

ただし、この場合はどうであろう。

痴呆の母がいなくなってしまい、家族総出で必死に探しました。なかなか見つからなかったのですが、○○店の店長さんが母を車に乗せて連れて来てくれ、無事に引き取る事が出来ました。その日は土砂降りだったため、母を見かけた店長さんが心配し、ご自分の車に乗せて関係者を探し回ってくれたそうです。母は肺炎にかかって入院しましたが、お医者様のお話だと、もう少し見つかるのが遅かったら危なかったとのことでした。

店長さんにもお礼を言いましたが、お礼の品も受け取ってくれませんでした。本当に感謝しております。ありがとうございました。（メール）

確かにこのＣＶＳという生活資源は、認知症の母親をかかえる家族にサポートを提供したが、どうやら店長さんのパーソナリティに依存している可能性が大きい。また、特に先の事例のような、緊急事態への対応は、（それでも無関心を装う人たちがいることは認識しつつも）人間を突き動かしやすいはずである。

しかし、次のような事例をもう一度みてみよう。

先日、重い荷物を持って駅を目指して歩いておりましたが、夜で両手いっぱいの重たい荷物に中々たどりつけず、段々不安になっていました。その時、若い男性が私に話しかけてきて付いて来るのです。向かおうとする先の道が真っ暗でいよいよ不安になり、私はＣＶＳに入り助けを求めました。外では先ほどの男性が待ち構えています。するとオーナーさんが明るい所まで送ってくださるとおっしゃっておまけに重い荷物まで持ってくださいました。お陰様で私は無事、家にたどりつけました。お店の対応にとても感心しました。本当に感謝しております。このようなＣＶＳが増えるととても安心です。仕事中にもかかわらず、困った顔、いやな顔ひとつせずに送ってくださったことに、本当に救われました。（お礼のメール）

後半のオーナーさんの対応は、機転のきいた緊急の「対処」サポートかもしれないが、その前の状況をみてほしい。女性が夜道を重い荷物を持って不安の中、歩いている。そこ

に不審な男が声をかけてきて、ついてくる。さらにその先には真っ暗な道が続いている。彼女の不安はピークに達する。そこに、あかあかと電灯をつけたＣＶＳがある。彼女はどんなに安心しただろう。ここでは、ＣＶＳが街にあるということ自体が住民の安心感を醸成している。つまり、ＣＶＳの「空間的近接」（ここでは街の住民、誰にとってもということ）機能が働いているといえるだろう。これは「見守り」サポートである。

この活動の結果、強盗発生件数が減ったという報告が事務局からされているが、実はこの活動期間中、警察官が制服のまま立ち寄ったり、パトカーを駐車場に止めたりということをやっていたところがあった。これは警察による抑止力が働いたということである。そうなると、このような活動は、ＣＶＳ単体では効果が低く、地域の多様な主体と連携することこそ、不安解消の生活資源として効果を発揮するといえる。これはタクシーの項でも述べたとおりである。サポート機能を追加するとは、その生活資源自体に新しい機能を付加するだけでなく、他の生活資源との連携を意味するのである。

### ⑤ＵＲ「高齢者向け優良賃貸住宅」

**生活資源分類**

ハード資源（賃貸住宅）＋ソフト資源（緊急対応サービス）

**供給主体**

公領域の行政サービス（独立行政法人都市再生機構）

※　*企業であるが、公的要素が強いため*

市場領域のビジネスサービス（ホームネット株式会社）

**サービス内容**

・　高齢者向け優良賃貸住宅とはあとふるサポート

**埋め込まれたサポート機能**

都市再生機構（以下、ＵＲ）では、「高齢者の居住の安定確保に関する法律」に基づき、国の補助を受け、家賃負担を軽減する制度を取り入れた賃貸住宅、「高齢者向け優良賃貸住宅」を用意している。家賃軽減措置は、一定以下の所得でなくてはならない。対象は満 60 歳以上の単身者などで、住宅はバリアフリー化さており、希望者には有料で緊急対応サービスを付加している。このサービスがホームネット株式会社の「はあとふるサポート」である。トイレや浴室での緊急事態に救援を求めるボタンや、24 時間サービスデスクにつながるボタンなどが用意されている。

この住宅の入居者のコメントは、前章でも紹介した。

| |
|---|
| 風呂のときに、あっちこっちにボタン（非常呼び出しボタン）がついているといつもみてしまう。こんなときになんかあったらと思ってしまう。 |

| |
|---|
| すぐ答えてくれる。間違って押してしまったことがあって、すぐどうしましたと連絡が入る。あれは心強いです。反応がないとタクシーが飛んできてくれるみたい。 |

実際、緊急事態が起こり、ボタンが押されると、受信センターにつながり、指定連絡先、主治医などに報告するとともに、タクシーが安否確認を行うというシステムになっている。ここでもサポートシステムに、様々な供給主体がかかわっている。

ボタンがあちこちにあることが、不安をあおっているという見方もできるが、少なくともこの事例の高齢女性は心強く感じている。この住宅には「見守り」サポートが付加されていることは今までみてきたとおりである。また、家賃軽減の対象となる人には「資金提供・調達」の経済的「対処」サポートが供給されることになる。

しかし、この生活資源はハード資源（居住環境）ありきである。数には限りがあり、入居者には条件が設定されている。ＵＲによると、永山団地では、このタイプの住宅は、団地の１階か２階に設定されている。もちろん、団地の低層部もそれほど数がないので、常に空室待ちの状態だそうだ。そうなると、エレベーターのない５階建ての上層部に住む高齢者を低層部に住み替えさせるのも、ハード資源の数からいったら限界があることになる。そうなると、おのずと５階から住み替えできない高齢者に対しては、「移動」などのサポートが必要となることになる。

## ⑥ＮＰＯ「福祉亭」

### 生活資源分類

ハード資源（喫茶店のスペース）＋ソフト資源（食事提供や生活サポート）

### 供給主体

共領域のコミュニティサービス（特定非営利活動法人）

### サービス内容

- 喫茶サービス
- 生活サポート隊など

### 埋め込まれたサポート機能

先のＵＲの高齢者向け優良賃貸住宅がある永山団地に、団地の空き店舗を利用した福祉亭の拠点がある。福祉亭は、その空き店舗で喫茶店を経営しながら、集いの場所を提供しているとともに、その場から生まれる異世代の交流や高齢者の暮らしのサポートを行っている。

ここでは朝から晩まで、たくさんのお年寄りがお茶を飲んだり、食事をしたり、麻雀を楽しんだりと思い思いに過ごしている。カラオケや体操などのイベントもあって、いつもにぎわっている。今までの事例の中でも、福祉亭は何回も登場している。

> ここ永山はそういう意味では暮らしやすい。独り身だけど、ここに来たらいいし。昼４５０円でつくれといわれても、なかなか。友達できるし。碁や将棋をやったり。こういうのを他の所でもつくればいいんだけどね。ここが無くなったら、ちょっと昼間どこへ行ったらいいか困るね。こういうのがあちこちあればいいんだけど。

これは福祉亭の喫茶店としての生活資源について。「居場所提供」という「帰属」サポートである。

> 月１回の病院に行くときはタクシーで行くか、福祉亭でやっている生活サポート隊で車の送迎を使っている。会員になると１時間いくらという形で、車を運転できるひとがそのときいれば、病院まで連れて行ってもらえる。

これは生活サポート隊による「移動」サポートである。

> いまは、ここの洗い場にボランティアで週３回来ています。夕方の方が少ないようなので。３時頃家を出て、ここに３時半に入って、一応７時までという約束で。私としては、やはり人と接していないとおかしくなっちゃうと思って。日月は家にいて。火曜はこっちにきて。水曜は買い物に多摩センターまで行って、帰りは歩くんですよ。往復１時間かかる。ヨーカ堂。たまに、パルテノンに何かあったら聞きに行ったり。充実感というほどでもないほど、そこそこ。

そして、高齢女性が働く場所を得るという「役割付与」機能の「帰属」サポートである。他にも、様々なイベント開催による「動機づけ」、勉強会による「教育」、「情報提供・共有」、もちろん代行や補助の「対処」サポートもしている。つまり、喫茶店という場を中心に不安解消のサポートとしては全方位で行っていることになる。

また、次章に譲ることになるが、子育てと高齢化という不安におけるサポートを組み合わせ、学生や研究者、マスコミ、行政関係者など様々な人たちの交差点としても、大きな役割を果たしている。そこには「共助重視型」地域における「多様性の保持」という新しい自立のあり方を模索する姿がみえる。

## 5.4. 多摩市における生活資源の読み替えの結果

### 5.4.1. 生活資源のピックアップ

前項で地域のいくつかの生活資源を、不安解消のサポート機能を埋め込んだ仕組みとして読み替えを行ってきた。ここでは、現在、多摩市にある不安解消のため生活資源を可能な限りピックアップすることで、今後、多摩市に必要なサポート機能を導き出す。詳しい読み替えの結果は、巻末資料２の『多摩市における不安解消のための生活資源１００』を参照してもらいたい。

なお、生活資源のピックアップは、多摩市役所ホームページ、多摩市「生涯学習がいどぶっく」、多摩市「子育て・子育ちサービス・制度ガイド」、ＮＰＯ福祉亭・多摩市地域支えあい実施プロジェクト「おそばに置いて　お一人暮らしの方のための便利帳（諏訪、永山地区限定版）」、多摩ＮＰＯセンターに送付される市民活動団体のチラシ・パンフレット、多摩ネットワークセンター「はちたまニュータウンカタログ」を参照した。

### 5.4.2. 読み替えの結果

100 の生活資源（ソフト資源・ハード資源問わず）の中で、どれだけの不安の場面（同居、独居、移動、子育て、親の介護、コミュニティ、仕事）に対応し、どれだけのサポート機能を内包しているかを分析した。もちろん上記の不安に対応しない資源（例えば国際協力や障がい者援助）は除いている。その結果から読みとれることは以下のとおりである。

（１）「独居」の不安に対する生活資源は、顕在的にも潜在的にもある程度存在するが、「同居」の不安は、第 3 章で指摘したとおり、あまり意識にのぼらないため、対応する生活資源が、「独居」に比べ相対的に少ない。

（２）「移動」や「仕事」の不安に対処する生活資源が少ない。もちろん公共交通機関や、ハローワーク・就職に関する媒体などがあるのだが、ここのでの「少ない」は、サービス量ではなく、供給主体の多様性の少なさだと考えられる。

（３）「コミュニティ（助け合い組織）」に対する不安に対応する資源は、潜在的に多いが、それらが現在必ずしも機能しているわけではない。

（４）「帰属」サポートは、物理的な「居場所」という面では、多くのハード資源が存在するが、人のアイデンティティを保障する「拠るべきところ」という意味での「居場所」は少ない。自分が誰かの役に立っているという意識が持てるようなサポー

トがより必要である。

（５）「見守り」サポートは、今、様々な活動（わんわんパトロールなど）が行われているが、前提としての「帰属」、つまり顔のみえる関係の中の「見守り」であることが、そのサポートの効果を高めることはプロセスモデルでみたとおりである。そういう意味では、まだまだサポートの数は少ないといえる。

（６）「現状認識」サポート、つまり「相談」を受けるための生活資源は多く存在するが、そこから「動機づけ」サポートにつながるものが少ない。つまり、対象者を何かに参加するように「呼びかけ」たり、その人の活動を社会に「伝え」たりすることまでにはいたっていない。これはプライバシーを過度に重視することの弊害でもあろう。

（７）「対処」サポートのうち、資金提供や調達というサポートは少ない。これは民間組織では対応できない部分で、「福祉」という、助け合いをより重視する組織に頼らざるを得ないところである。ただし、それ以上に、サポートそのものを総合的にマネジメントするような生活資源は少ない。「暮らしの安心マネジメント」そのものの実施をサポートする資源が必要である。

## 5.5. 不安解消のための生活資源の考案

最後に、不安の場面、「安心の階段」、「サポートのプロセスモデル」など、本調査の結果から、多摩ニュータウンに必要な産業やサービスをワークショップ形式で導出する。ワークショップは、本調査受託団体である特定非営利活動法人エヌピーオー・フュージョンの関係者が集まり開催した。

その中で多摩ニュータウンに必要な産業・サービスとして、あげられたのは、以下の一覧である。

### 多摩ニュータウンに必要なサービス

| カテゴリー | 具体的サービス |
|---|---|
| 仕事系 | パートで働けるような商店 |
| 仕事系 | キンコーズのような事務サービス |
| 仕事系 | 雪が降った時に家の玄関先を雪かきをにすぐ来てもらえるサービス |
| 仕事系 | 高いところにある電球が切れた時にすぐ来てくれる電気屋さん |
| 仕事系 | 代筆サービス |
| 仕事系 | 近隣者の人材バンク |
| お店系 | 食材の宅配 |
| お店系 | 事務・文具用品の「アスクル」のようなサービス |
| お店系 | 少人数用の少量パックがあるスーパー |
| お店系 | 居酒屋 |
| お店系 | 買い物代行サービス |
| お店系 | 下町情緒、横町文化のお店 |
| お店系 | 出張食事づくりサービス |
| お店系 | おしゃれな喫茶店 |
| お店系 | ホームレストラン |
| お店系 | 居合飲み屋 |
| お店系 | 食堂 |
| お店系 | 女性一人でゆっくりできる居酒屋 |
| お店系 | 惣菜屋、二人で一食分ぐらいの小分けができるような。安い。 |
| お店系 | 喫茶店 |
| お店系 | 学校内パブ |
| お店系 | 計り売りをしてくれる店 |
| お店系 | 居合商店街 |
| お店系 | おしゃれなお店が並ぶ通り |
| 後始末系 | 生前後始末サービス |
| 後始末系 | 財産相続の相談にのってくれる人 |
| 後始末系 | デザイナーズ墓地 |
| 後始末系 | ライフプラン |
| 後始末系 | 保険サービス |
| 後始末系 | リバースモーゲージ |
| ペット系 | ペットの老人ホーム |
| ペット系 | わんわんパトロール前提のペットショップ |
| ペット系 | ペットホテル |
| ペット系 | 植物水やり、預かりサービス |

| カテゴリー | 具体的サービス |
|---|---|
| 寄り系 | 祭り、神輿 |
| 寄り系 | 定期的な集日 |
| 預かり人系 | 乳幼児を夜預かってくれる場所 |
| 預かり人系 | 保育園＋老人ホーム |
| 宿泊系 | 下宿 |
| 宿泊系 | ホームレストラン |
| 宿泊系 | 民宿 |
| 宿泊系 | ホームステイサービス |
| 健康系 | 往診する医者 |
| 健康系 | 開業医（団地内） |
| 健康系 | 健康ランド |
| 健康系 | 鍼灸 |
| 健康系 | 配達してくれる薬屋 |
| 健康系 | フィットネス |
| 健康系 | 歩いて行ける場所で健康体操ができる施設 |
| 移動系 | 団地内の駐車場 |
| 移動系 | ご町内声かけタクシー |
| 移動系 | 歩道専用電気自動車 |
| 移動系 | 図書館から自宅まで送ってくれるサービス |
| 移動系 | シャトルサービス |
| 移動系 | どこでも自転車 |
| コミュニケーション系 | 親とのテレビ電話サービス |
| コミュニケーション系 | 広域自治体組 |
| コミュニケーション系 | 領域にかかわらず困った時に電話ができる地域のコールセンター |
| コミュニケーション系 | コミュニティラジオ |
| コミュニケーション系 | 町内連絡網 |
| コミュニケーション系 | 自分の親の相手をしてくれる友達の場、寄合場 |
| コミュニケーション系 | 話し相手提供 |
| コミュニケーション系 | 寺、広場 |
| コミュニケーション系 | サロン |

これをまとめると、「柔軟な雇用」「事務支援」「訪ね合い」「移動」「寄り合い」「食事」「助け合い」「保険」「生き物による癒し」「ハレの賑わい」「防犯」「自治」「治療支援」「財産保全」「子育て支援」「健康チェック、介護予防」「ストレス軽減」「葬祭支援」などのサービスという分野がみえてくる。

第７章では、これらを踏まえ、具体的な「安心づくり産業」の提案とその実現のためのロードマップを提案する。

# 第６章　想定されるシナリオイメージ

## 6.1.「共助重視型」への移行

聞き取り調査等を踏まえると、安心と不安を左右する大きな要因は「プライバシーと自立意識の融合」である。それを踏まえ同居、別居、移動、子育て、仕事など、いくつかの場面で感じる不安を安心に変えていくためには、適切なサポート方法（サポートのプロセスモデル）を本人が受容できる（安心の階段を昇るプロセス）形で提供しなくてはならない。

そのときに有効な方法として、本調査では、「地域の生活資源に（新たな）サポート機能を埋め込む」、または「地域の生活資源を組み合わせてサポートのプロセスモデルを実現する」、「安心の階段やサポート機能から新しい生活資源を考案する」という方向性を提示した。

このようなサポート提供のためには、二つのシナリオが考えられる。

一つは、これまで通り「自分（と配偶者）だけで自立して暮らすことが望ましい」という居住者向けのシナリオで、「過度なプライバシー＆自立重視型」だ。現状の延長であるが、いざ居住者が助けを求めようとした時に、周囲はそれに十分に対応できないおそれがある。

もう一つは、「今は自立を重視しているが、家族で老人を支えるのは無理なので、『ある程度』プライバシーを犠牲にしても、様々な周囲の人間で支え合って暮らしていくことが望ましい」という人向けのシナリオだ。これを「共助重視型」と呼ぼう。

「過度なプライバシー＆自立重視型」シナリオが成立していたのは、今となってみると、若い核家族に適合した住環境と、まだ機能していた親世代の親族ネットワークであった。その条件は、少子化で世帯人員も減少している現代ニュータウンにはあてはまらない[5]。現在は、少子型社会への移行期であり、多数の高齢者も介護しなくてはならない。過度なプライバシーを徐々に取り除き、ほとんど機能していない「支え合い機能」を強めていくという、「共助重視型」への移行シナリオを検討すべきだろう。

## 6.2.「自立」を超えて～多様性の保持という新しい自立

「生活資源へのサポートの埋め込み」は、ある程度「過度なプライバシー＆自立重視型」

[5] 1925 年～49 年生まれの人々は、多産他死型から少産少子型に以降する人口転換期にあたる。この時期、死亡率が減少し、成人した子どもも多くなった。「以前は親の兄弟が多かった」というのは、この現象である。この子ども達が、成人後は世帯分化し、核家族となった。核家族は一世帯の中に一組の夫婦と未婚の子から成る家族であるが、兄弟が多いために親族ネットワークが保たれており、家族で介護ができたと言われる裏には、親族ネットワークが動員されていることを見落としてはならないという論者もいる。落合美恵子『２１世紀家族へ』有斐閣、1994

という多摩ニュータウンの特性に配慮した、「共助重視型への移行シナリオ」に適した方法だといえる。サポートをサポートと思わせないで、普段の生活のなかで居場所を与えたり、見守ったり、動機づけしたりすることは有効であろう。ただし、「過度なプライバシー＆自立重視型」特性そのものが、社会の実態に合わなくなってきた以上、扉をたたいて、「○○さん、元気ですか。一緒に福祉亭に行きましょうよ」という「大きなお世話」をしなければならない時代に突入してきていることも認めなければならない。

そのような時代の中で「自立」とは何を意味するのだろうか。

「他人をよせつけない自助・独立」ではなく、「様々なサポートを受けながら、かけがえのない個人として生きていく」ことは、すでに言われていることであり、私たちもそれを支持する。しかし、どちらも「サポートを受け入れるか、受け入れないか」という枠組のなかでの話である。本調査の結果を深堀すれば、「共助重視」社会における「自立」の意味を、この枠組みを取り払って、再構築する可能性が生まれてくる。

そのときにみえてくるものは「多様性の保持」という価値である。何人かのコメントから、「サポート関係の非対称性」というよりも、「何かひとつだけの関係に固定化されること」に対する嫌悪・恐怖を読み取ることができた。確かに私たちは、家族であろうと、友人関係だろうと、職場であろうと、そこだけにしばられたくないという気持ちがある。しかし、それは決してプライバシーを厳守することと同意ではない。それよりも多様な「場」や「関係」を行き来することで、常に新しい刺激をもらい、「生きがい」を感じる自由が欲しいといったほうがよい。だからこそ、それぞれの場所や関係への「帰属」、異質な人たちとのつながりをつくる「動機づけ」、それぞれを行き来する「移動」が、この世界では重要な機能となるのだ。

また、「多様性」そのものに価値を置くということは、多くの「場」や「関係」ひとつひとつに完全に適応する必要がないことも示している。完全な適応は、私たちに体力や知力、そして精神力を要求する。自助という「自立」が価値の社会では、適応できないことが「悪」である。ところが加齢していけば、これらの力を失い、適応できなくなっていくことは仕方がないことである。それでもこの不適応に対する後ろめたさがどうしてもつきまとう。これはサポートを受け入れる心を持ったとしても生まれる感情であろう。

しかし、「多様性の保持」＝「自立」であれば、どこかで完全にサポートに依存していても、別のところで、少しでも社会に役に立つ仕事をしていればいいし、それぞれの場所で、ほどほど適応できれば、全体として多様性を維持している自分に納得するはずである。このような「多様性」に価値を置き、周囲から独立した「自立」ではなく、人間関係の中でこそ発揮される「自立」につながると考えられる。

したがって「自立」とは、単なる心の基準ではなく、自分の活動が関わり・機会の中で社会に位置づけられ、自分を意味づけていく生成的なプロセスともいえる。

安心は居住者の暮らしの中にある。「安心の階段」を登るためには、サポートを送受信し

ながら、多様な場や関係を行き来しなければならない。その「自立」を実現するのが、「暮らしの安心マネジメント」であり、その具体的な方法のひとつが、「安心づくり産業」の創造にあるのだ。

# 第７章　「安心づくり産業」提言に向けて

調査結果を踏まえ、ここでは具体的な「安心づくり産業」のプロジェクトと実現のためのロードマップを提案する。特にここではニュータウン区域を想定している。

## 7.1. 多摩ニュータウンの「安心づくり産業」１０のプロジェクト

### ①広域自治組織「多摩組」設立・運営プロジェクト

１．概要

現在、ニュータウン住民とそれ以外の居住地住民とでは、住環境に対するアイデンティティが異なっている。多摩市内ニュータウンの住民自治組織「多摩組」をつくり、そこで地元で解決できる様々な課題に対応できるようにする。

２．事業内容

- 多摩組オフィス、会員制度、財源など、組織の基本概要と役員の業務、役員選出方法などを定める。
- 多摩組主管事業などを定める。

３．利用する生活資源

- 団地内の空き部屋
- 自治会、マンション管理組合、商店会など既存の自治組織

４．運営方法

- 会員の会費等により、運営される。会費は適時定める。将来的には住宅管理の財産管理を行う地区管理会社への移行なども考えられる。
- 各住区に支部、各団地に営業所をつくる。

このプロジェクトは、「暮らしの安心マネジメント」を行う主体の創造である。サポート機能では、「対処」サポートの「管理」機能であり、前にみたように、多摩市において、この機能を埋め込んだ生活資源は少ない。この自治組織が以下で提案する「暮らしの安心づくり産業」で管理運営を担当する。

## ②団地屋台村商店街

### １．概要

団地の前に、屋台を出し、一人暮らしの高齢者などに利用してもらう。遠くまで外食することはできないが、弁当配達では引きこもってしまう可能性があるので、階段やエレベーターを降りるだけで利用できる様々な食事サービスを屋台で利用する。

また、夜の営業も認めることでアルコールの提供も行い、コミュニケーションの場としても期待ができる。新しい商店街としての役割を果たす。

### ２．事業内容

- 惣菜や定食が食べられ、お酒も飲める屋台の運営
- テイクアウトも可能。特に一人暮らしや夫婦だけの世帯向けに少量・小分けしたものを用意する。食材のみの宅配も行う。
- 夜の営業で、アルコールも提供し、居酒屋としても利用できるようにする。

### ３．利用する生活資源

- 既存の商店街や団地の中庭や歩道（歩車分離の特性を生かす）

### ４．運営方法

- 「多摩組」によって運営される。
- 基本的に既存商店街や団地内の居住者によって営業されるが、「多摩組」が許した外部の人間にも門戸を開く。
- ただし、顧客は団地内とその周辺地域になるので、爆発的な発展はのぞめない。持続可能な経営で、主婦やサラリーマンの副業、リタイヤ後の高齢者の事業として行えるような仕組みにする。

## ③シニア飛脚

### 概要

近場にあまり急がない荷物を届けたいときに、元気な高齢者が徒歩や交通機関を使って運ぶ飛脚サービス。文書などのあまり重くないものを配送する。また、ちょっとした買い物ができない人のために買い物代行を行う。

### 事業内容

- 自分で運ぶほど時間がなく、バイク・自転車便を利用するほど急いでいない市内

向けの荷物（あまり重くない書類など）を元気な高齢者が徒歩と公共交通機関を利用して運搬する。運搬する書類は、役所関係の定期便や、市内の公共施設やＮＰＯなどのニュースレターなど。

- 子育て中の女性や、体の不自由な高齢者・障がい者、昼間働いている一人暮らしのサラリーマンなどのちょっとした買い物の代行を行う。
- 買ったものは宅配するか、団地の「多摩組」営業所で預かり、引き取りに来てもらう。

### １．利用する生活資源

- 公共交通機関
- 団地内の空き部屋（多摩組営業所兼シニア飛脚ステーション）
- 歩道専用電気自動車（後述）

### ２．運営方法

- 飛脚スタッフは、リタイヤ後の元気な高齢者（６０代）で、多摩組の組員。団地内のシニア飛脚ステーションで待機する。電話による当日の受付やインターネットを利用した事前予約で荷物運搬・買い物代行を行う。
- 市役所、市内の公共施設と定期便の契約を行い、定期的な収入を確保する。
- 保育園などと契約し、子育て中の母親の会員組織をつくる。
- スタッフはおしゃれな制服と専用のケース（車つきの鞄）を持ち、ナビつきの電子地図を携帯する。

## ④都市民泊プロジェクト

### １．概要

団地の空き部屋を、民宿として活用し、コミュニティ全体で運営し、「おもてなし」するサービス。外部からの客を迎えることで緊張感を保ち、事業の中で住民がサポートしあう構造をつくる。

### ２．事業内容

- ショートステイサービス
  いわゆる民宿サービス。週末を多摩ニュータウンの自然の中でゆっくり過ごしたい人に団地の空き部屋を利用してもらう。また、記念日お祝いに特化した様々なサービスを提供する。

・　ロングステイサービス
いわゆる下宿サービス。ニュータウン内の大学生や外国からの留学生に空き部屋を利用してもらう。下宿なので３食ついている。

・　ホームレストランサービス
同様に空き部屋を個室レストランとして利用してもらい、記念日を祝う料理やサービスを提供する。地元のレストランのシェフや料理自慢の一般居住者、「おふくろの味」を守るおばあちゃんなどが腕を振るう。

### ３．利用資源

・　団地の空き部屋
・　一人暮らしの高齢者（フロント機能）
・　料理人（地元レストラン、居住者など）
・　地域の一芸に秀でた方々（記念日祝いサービス）など

### ４．運営方法

・　多摩組で運営する。
・　フロントとして、団地内の一人暮らしの高齢者に働いてもらう。
・　ショートステイとホームレストランは、ホテルや既存レストランと差別化するために、「記念日」を祝う人たちへのサービスに特化する。結婚、出産、進学、就職、退職、還暦など様々な記念日を祝う場として利用してもらう。
・　顧客の記念日をすべてデータベース化することで、記念日近くなったら、メールや郵便で告知、囲い込みを図る。
・　食事サービスのほか、地元のミュージシャンやエンターテイナーを、お祝いのサービス要員として組織化しておき、顧客の希望でコーディネイトする。

## ⑤団地大学プロジェクト

### １．概要

団地そのものをキャンパスとして利用し、民間の教育事業者や地域のＮＰＯを中心に、カリキュラムを組み立てる。団地の空き部屋がゼミ室や、学生寮、集会室が講義教室となる。

### ２．事業内容

・　高齢化社会の問題を研究するための研究機関

・　ジャーナリストやルポなどの物書きを目指す人のための塾
・　高齢者と一緒に住み、聞き取りや参与観察を行い、研究に役立てる。

**３．利用する生活資源**

・　団地
・　住民
・　地域の学習塾、カルチャーセンター、ＮＰＯ
・　地域の大学

**４．運営方法**

・　多摩組支部が、学生課、購買、学食、管理人、警備、講師手配、清掃などを担当して、大学を運営する。
・　学生食堂や購買は、団地屋台村商店街が担当する。
・　研究対象と研究室を同時に提供することになる。

以上のプロジェクト群は、団地とその周辺の資源を利用し、サポート機能のうち、「帰属」サポートを埋め込み、地域の高齢者を中心とする住民に事業の中で役割を与えることで、多様性の確保（＝自立）を実現する試みである。

## ⑥ペットコーディネーター

**１．概要**

一人暮らしの高齢者の「癒し系」となるペットや植物の総合的なコーディネーター。団地の商店街の空き店舗に、ペットショップとペットホテルを併設する。

**２．事業内容**

・　高齢者に合ったペットを販売し、相談などにも応じるペットショップ事業
・　ペットの在宅トリミングサービス
・　旅行や入院などのときに、預かるホテルも併設。
・　高齢化したペットの介護のサポートサービスも提供。
・　旅行や入院時の観葉植物の世話も行う。
・　ペットを通じた交流の場を定期的に設ける。

３．利用する生活資源

・　団地の商店街の空き店舗
・　動物関係の有資格者

４．運営方法
・　顧客を組織化し、定期的な会合やイベントを行う。例えば、組織的な「わんわんパトロール」など。
・　ペットの様子をみるといって家に入り、飼い主である一人暮らしの高齢者の様子や話し相手になる。それが「見守り」や「動機づけ」サポートになる。

## ⑦多摩ニュータウン・ヒューマンマップ・プロジェクト

### １．概要

高齢者のライフヒストリーを 1000 人聞き取りして、まとめることで多摩ニュータウンの人間の地図をつくる。聞き取りをする中で、引きこもりの高齢者の「現状を把握」し、サポート体制を考える。聞き取りの最前線は、福祉関係の学生やカウンセラーの卵、作家や物書きの卵など。そのサポートの後ろ側に「対処」サポートの組織が控える。

### ２．事業内容

・　多摩大学経営情報学部の講義「地域社会とビジネス」と連動し、学生が高齢者のライフヒストリーを聴取する。将来的には福祉系の学生やカウンセラー、作家などの卵などにも依頼する。
・　取材した内容は、web アプリケーション「i-debut」に使って、ネット上に公開する。ＵＲＬ（http://www.atpass.co.jp/tama/）

### ３．利用する生活資源

・　多摩大学経営情報学部（取材・マップ作成）
・　ＮＰＯ福祉亭（聞き取り対象者紹介）
・　株式会社アットパス（サイト運営）
・　株式会社ヌールエ（Ｗｅｂアプリケーション提供）
・　高齢者

### ４．運営方法

・　このプロジェクト自体は多摩大学が中心となって、すでに立ち上げている。
・　今後は財源を確保して、将来的には多摩組が管理するデジタルアーカイブとなり、

多摩ニュータウンの歴史を刻むためのプロジェクトとして続けられる。

## ⑧「葬祭支援」プロジェクト

### １．概要

自分の死に関する準備と死んだときの「後始末」の総合サービス。財産の処理、お葬式、霊園などの手配などを自分で考えて、実行するためのサポートサービス。「後始末」について積極的に取り組むことで、晩年をよりよく生きる「動機づけ」を行う。

### ２．事業内容

- 財産相続や処理の相談と晩年のライフプランの立案、リバースモーゲージなど
- 霊園の手配や墓地のデザイン、コーポラティブ墓地の建設
- 多摩組による葬祭のサポート
- 身寄りのない人へのサポート

### ３．利用する生活資源

- ニュータウン内の未売却地（霊園用地）
- 近隣の寺社、斎場、葬儀業者
- 病院
- 保険会社やライフプランナー、ファイナンシャル・プランナーなど

### ４．運営方法

- 多摩組が中心になって、その地域の葬祭をマネジメントする。葬祭時は地域で、その葬祭を支えるような体制を整える。
- このプロジェクトに関わる寺社、業者は多摩組と提携する。

## ⑨住み替え支援プロジェクト

### １．概要

多摩ニュータウンでは、ライフステージの移行期に住み替えのニーズが発生する。都心、あるいは郊外の戸建て住宅に移転する住民も多いが、ニュータウン内で居を移す住民も見られる。

このプロジェクトでは、住環境マネジメントの一貫として、住み替えをスムーズに行ってもらうための支援と、それにまつわる生活支援サービスを行う。

２．事業内容

・　暮らしと住まい相談センターを設け､住み替えを希望する方への窓口業務を行う。
・　住み替え、暮らし替えに関する様々な専門家を、「住環境マネジメントサービス」の一端を担う人材としてトレーニングを行う。

３．利用する生活資源

・　ニュータウンに関心を寄せる、住宅・財産管理・まちづくりの専門家人材

４．運営方法

・　現在、ＮＰＯフュージョンにより、事業化の具体的な準備段階にある。
・　2006 年 4 月に「暮らしと住まい相談センター」開設。

以上のプロジェクト群は、現在、特に高齢者の引きこもりなど、他者とのつながりを拒否した暮らしを送ろうとしている人たちをサポートするためのプロジェクトである。サポート機能のうち、「現状認識」、「動機づけ」を中心に埋め込む。

## ⑩歩道専用電気自動車プロジェクト

１．概要

ニュータウンの歩道専用の電気自動車を開発する。環境にやさしい電気自動車を、比較的広いニュータウンの歩道を走らせ、団地と拠点（駅、スーパー、公共施設）を定期的に結ぶシャトル便とする。10 人程度が乗車できる程度の広さで、スピードは歩道を走るので遅い。車道の交通は、路線バス、ミニバス、タクシーなど充実しているので、坂が多い歩道の「移動」をサポートする手段として開発する。

２．事業内容

・　歩道専用電気自動車の開発と運行
・　「歩道を走る自動車」の規制緩和に関する研究とロビー活動や啓蒙活動

３．利用する生活資源

・　ニュータウンの歩道
・　電気自動車
・　タクシー会社やバス会社のノウハウと人材

・　自動車メーカー

**４．運営方法**

・　多摩組によって、運営される。車道の交通ではないので、既存の公共交通機関（タクシー、バス、電車）と競合しないので、彼らのサポートを受け、運行システムなどを研究する。
・　自動車メーカーと共同で電気自動車の開発を行う。
・　歩道の走行を可能にする規制緩和への働きかけを行う。また、このシステムを機械工学、都市工学、社会学など横断的に研究し、社会に対して啓蒙活動を行う。

このプロジェクトは、多様性の確保に必要な「移動」のサポートを埋め込んだ事業である。

## 7.2.「暮らしの安心づくり産業」実現のためのロードマップ

上記で提案したプロジェクト群をどのように実現に導き出していくか。その 5 年間のロードマップを最後に示す。

### フェーズ１（1 年目）

**１．「多摩ニュータウン 20 人委員会」の設置呼びかけ**

広域地域自治組織「多摩組」設立のために、市民だけの 20 人委員会を組織し、「多摩組み」の可能性を検討し、フェーズ２以降の運営もこの委員会が中心となって行う。

**２．各プロジェクトの実現可能性の評価**

「多摩組」以外の 9 つのプロジェクトの実現可能性を調査・評価する。特に法的な規制があるか、あるとしたらどうしたら乗り越えられるかを検討し、実現度によって、取り組む優先度をつける。

**３．モデル地域の選定**

優先度が高いプロジェクトに関して、実施するモデルとなる住区、団地などを選定し、関係機関と調整を開始する。

**４．フェーズ２以降の計画立案と発表**

「20 人委員会」によって立案、社会に広くその計画を発表し、広報活動を行う。特に財源の確保は必須。

**フェーズ２（2 年目）**

フェーズ２以降は「20 人委員会」が立案した計画に基づき実行するが、おおまかな計画の可能性を以下に述べる。

**１．モデル地域における「多摩組」の設立**

「多摩組」は広域自治組織であるが、いきなりニュータウン全域を網羅する組織は設立できないので、モデル地域からスタートする。

**２．モデル地域におけるプロジェクトの社会実験**

優先度の高いプロジェクト（ひとつかふたつ）を社会実験として実施。その結果の調査・評価。次年度以降の実験にフィードバックする。

**フェーズ３（3 年目）～フェーズ４（4 年目）**

- 社会実験の続行（別プロジェクトや他モデル地域での実施）
- 第 2 のモデル地域の選定と多摩組支部の設立
- ニュータウン各地域での多摩組支部設立
- 広域多摩組の組織体制の確立（各委員会の設立など）
- 社会実験の結果報告、広域多摩組の設立を記念したシンポジウム開催

**フェーズ５（5 年目）**

- 多摩組主催のニュータウン全域を対象にした「多摩ニュータウン祭り」の計画と実行。これにより、多摩組がニュータウンの自治組織であることを内外に示す。
- 多摩組の法人化

以上